地質学雑誌　第110巻　第10号（通巻1309号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成16年10月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 *News*

Vol.7 No.10 October 2004

THE GEOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN 1893

日本地質学会法人化募金活動へのあらためてのご協力のお願い

いつしか炎暑も過ぎ秋冷の候となりましたが，会員の皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます．皆様には学会法人化募金活動につきましてご努力をいただき深く感謝する次第です．おかげさまであと300万円ほどの募金が集まれば，目標を達成する段になりました（醵金総額　13,323,695円（2004年9月30日現在））．この後は年次総会のような特段のイベントもなく，座視していては目標達成がままなりません．再度の募金や存知よりの会員および企業への募金の呼びかけもあわせて，学会員より広く募金をいただくために，一段の活動強化を図りたくご協力をお願いする次第です．

総会で法人化への移行が承認され，会長始め新執行部の体制も新たに構築されました．また，過日の文部科学省との交渉でも法人化への道筋に進展が見られ，今年度内の法人化も現実味を帯びており，その意味でも基金の早期の獲得が不可欠な状況であります．上記事情に鑑みまして皆様の今一度のご協力をお願いいたしたく存じます．

日本地質学会会長　齊藤靖二
副会長・募金委員会委員長　加藤碩一
副会長・法人化委員会委員長　木村　学

銀行口座：みずほ銀行　神田駅前支店　普通預金　2058646番
ニホンチシツガツカイボキンイインカイ　カトウヒロカズ
（日本地質学会募金委員会　加藤碩一）

郵便振替口座：00160-3-776921　日本地質学会募金委員会

待望！！
学会オリジナルフィールドノートが出来ました．

サイズ：12×19cm．ハードカバー，ビニールレザー加工，金箔押し．
カラー：チョコレートブラウン．
用紙は野外調査に最適な，雨に濡れても丈夫な高級紙・レインガードを使用しています．是非ご活用下さい．
ご購入を希望の方は，学会事務局まで．　会員頒価　500円／冊．

日本地質学会*News*

Vol.7 No.10　October 2004

The Geological Society of Japan *News*
日本地質学会/〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15
井桁ビル ６Ｆ
編集委員長　大友幸子
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

2005年度会費口座引き落としのお知らせ

振替予定日：**12月24日（金）**

新たに会費口座引き落としをご希望の方は，巻末の振替依頼書を，**11月15日（月）**までにお送り下さい．

日本地質学会会員名簿作成について

2004年会員名簿は12月初旬頃の発行予定で準備を進めております．準備に先立ち，会員の皆様には，会員名簿掲載承諾に関するアンケートをお願いいたしました．当初より申し上げておりました通り，**アンケートのご返送がない場合は，「推定承諾」と見なし，2002年会員名簿に掲載されている項目に準じて掲載いたします．**なにとぞご了解下さい．

2004年10月
運営財政部会　会員担当

Contents

表２　**日本地質学会法人化募金活動へのあらためてのご協力のお願い**

2005年度会費口座引き落としのお知らせ ……1

日本地質学会会員名簿作成について ……1

日本地球惑星科学連合 Earth and Planetary Science Union of Japan（仮称）設立準備会へ日本地質学会も合流を決定！（木村　学）……2

案内 ……4
第15回地質汚染調査浄化技術研修会―おもにVOC汚染等を対象に―/シンポジウム「私たちの明日を考える：地球史が語る近未来の環境」/地球惑星科学関連学会2005年合同大会開催

公募 ……5
信州大学理学部地質科学科教員公募/島根大学総合理工学部地球資源環境学科教官公募/千葉大学理学部地球科学科教員公募/筑波大学大学院生命環境科学研究科教官公募/九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門教授

各賞助成 ……6
平成17年度「とやま賞」候補者推薦募集

報告 ……7
日本学術会議第19期第３回地質学研究連絡委員会議事録

CALENDAR ……7

紹介 ……8
日本の地形６　近畿・中国・四国　太田陽子ほか編（水野清秀）

ジオロジストのための法律メモ ……9
著作権譲渡等同意書の解説（1）

表紙紹介
シドニー・アーガイルカットの砂岩露頭（貴治康夫）……9

特集 ……10
The 32nd International Geological Congress 2004 in Florence（IGC：2004）

Topics ……18
「第三紀」の消滅に続き，「第四紀」も！－地質年代区分からこれらが消えた？－（斎藤文紀）

院生コーナー ……19
XI International Palynological Congress参加報告（梅津慶太）

院生（研究生）の方へ ……20
平成17年度（2005年度）院生割引会費の受付開始

学会記事 ……21
2004年度　第16回理事会議事録
2004年度　第５回評議員会議事録

巻末　預金口座振替依頼書

広告取扱：株式会社廣業社
〒104－0061 東京都中央区銀座8－2－9　電話 03－3571－0997　　印刷・製本：日本印刷株式会社

日本地球惑星科学連合
Earth and Planetary Science Union of Japan（仮称）
設立準備会へ日本地質学会も合流を決定！
ー日本の地球関連科学の大連合へ大きく歩み出すー

副会長：木村　学
（地球惑星科学連携のあり方ワーキンググループ：地質学会派遣委員）

内外の激動する情勢を背景として，春に地球物理学会長懇談会から合同大会のありかたに関する見直しが提起されました．それを受けて，合同大会共催協賛学会20学会に対し（地物系だけではなく地質系も多いので），ワーキンググループ参加が呼びかけられ，これまでに２回連携ワーキンググループが開かれました．すでに第２回会議において新しいユニオンの結成をめざし，設立準備会を呼びかけることが決まり，これまで，ほとんどの学会から，（仮称）日本地球惑星科学連合（EPSU-J）設立準備会へ合流するとの賛同が得られております．

この新ユニオンは合同大会の開催に留まらず，総合科学技術会議や学術会議等に対する地球科学としての統一歩調，統一的国際的科学情報発信と国際連携，地球科学としての統一した社会提言など，文字どおりの広い学会のbottom-up機能を備えるべきもの，と展望しております．日本地質学会はこの呼びかけにいち早く応じ，８月13日の臨時理事会で設立準備会へ積極的に参加することを決定し，先の千葉大会総会において，承認されました．また岩鉱，古生物，第四紀などの地質系学会も設立準備会への参加を決めております．また，これまで合同大会へは参加をしてこなかった，気象学会や海洋学会も合流することとなり，文字どおりの日本における地球惑星関連学界の歴史的大合流になると見られております．これらを受けて，10月の早い時期に設立準備会発足が予定されております．詳細はワーキンググループ議事録をご参照下さい．来年の合同大会でのユニオン設立をめざしております．このような中，日本地質学会はこのユニオンの中で中心的役割を果たせる学会となるべく，社団法人をめざして急ピッチで内部改革と法人化準備をすすめております．その一環として，秋の学術大会と共に，春の合同大会を一層重要な柱として位置づけ，より多くの学会員の参加を促すべく，総会（新しい会則により代議員総会200名）の合同大会時の開催を決定しました．また主導するセッションの見直し等をすすめております．

日本の地球科学界のあり方が，急速に転換しておりますので，会員各位に置かれましては行方を注視されますとともに，地球科学の発展，地質学の発展のために積極的なご意見を御寄せ頂くようお願い申し上げます．

連携のあり方に関する検討ワーキンググループ第１回会合報告

日時：平成16年６月19日（土）
13：30－17：15
場所：東京大学地震研究所第２会議室

出席者（敬称略）
日比谷紀之（日本海洋学会），中川光弘（日本火山学会），近藤昭彦（水文・水資源学会），本山秀明（日本雪氷学会），小寺浩二（日本陸水学会），近藤豊（日本気象学会），平原和朗（日本地震学会），本蔵義守（地球電磁気・地球惑星圏学会），加藤照之（日本測地学会），田近英一（日本惑星科学会），鈴木啓助（日本水文科学会），川幡穂高（日本地球化学会），村上隆（日本鉱物学会），奥村晃史（日本第四紀学会），木村学（日本地質学会），丸井敦尚（日本地下水学会），渡辺秀文（地球惑星科学関連学会連絡会），松浦充宏（地球物理学研連），河野長（IUGG），浜野洋三（合同大会運営機構，WG取りまとめ）

配布資料

1　ワーキンググループメンバー表
2　地球物理学関連学会学会長等懇談会関連資料
3　日本学術会議関連資料
4　合同大会，連絡会関連資料

事項

1　本ワーキンググループの目的についての認識を共有するため，地球物理学関連学会学会長等懇談会での議論を踏まえ，地球惑星科学関連学会合同大会と同運営機構のこれまでの実績，日本学術会議の改組に向けた動向，地学教育問題に関する議論，及び総合科学技術会議における地球惑星科学の現在の位置付け等について，情報交換，議論，検討を行った．

（補足事項）
・新しい日本学術会議において，物理・化学等の分野と平等に発言するには，地球惑星科学に関連している多数の学会の窓口を，１つ（あるいは２つ）に絞っていく必要があると考えられる．
・地学教育問題への対応については，地球惑星科学全体としての窓口を設け，対応，提言していくことが必要とされる．

2　地球惑星科学のコミュニティー全体として対外的（国内及び国際）に対応できる窓口組織を創設することについて合意が得られた．

（補足事項）
＊本組織は既存の各学会と共存する組織である．参加各学会においては，それぞれ地球惑星科学以外のさまざまな分野もカバーしていることに配慮し，「地球惑星科学」に関係した一部の機能（主として外交機能）に限定して本組織に委託するものと考えられる

3　この組織案作りについては，本ワーキンググループで作成した具体案を各関連学会に提示し，各学会からのご意見を頂くというプロセスを繰り返すことにより，進めていくことを確認した．

4　その第１段階として，本組織の満たすべき要件について，下記の案を作成し，学会長等懇談会及び各関連学会に提示し，各学会からのご意見を頂くこととした．

組織要件

（１）本組織は，１）国及び社会からの地球惑星科学コミュニティーへの諸要請の窓口になるとともに，コミュニティーの意見を集約し，それを外に向かって発信／公開していく機能の他，２）地球惑星科学に関わる国際学協会や国際プロジェクト等への対応する機能，３）地球惑星科学に関わる研究成果の発表と情報交換のため合同大会を開催する機能，及び４）地学教育等の地球惑星科学コミュニティー共通の問題の検討を行う機能を持つ．

（２）上記の各機能を実現するために，関連学会からの代表者をメンバーに含む理事会相当の組織と共に，以下に掲げるような各種委員会組織を持つ．
・合同大会を企画運営する委員会：地球惑星科学に関わる研究成果の発表と情報交換のために，地球惑星科学合同大会を主催する．
・広報活動を行う委員会：ニュースレターやホームページ等により地球惑星科学コミュニティー及び社会一般への広報活動を行う．
・関連学術誌に関わる委員会：地球惑星科学に関連した成果の学術誌による発信を行う．
・地学教育問題を検討する委員会：地学（地球惑星科学）教育の在り方について検討し提言を行う．

（補足事項）
・日本学術会議での学協会の認知要件，今後のタイムスケジュールについては，可能な限り早急に情報収集を行う．
・本組織が対象とする会員数は，各参加学会の会員数，合同大会への個人登録者数等から，「地球惑星科学」に関わる研究者として約１万人を想定している．

連携のあり方に関する検討ワーキンググループ第２回会合報告

日時：平成16年７月24日（土）
13：30－16：50
場所：東京大学地震研究所第２会議室

出席者（氏名省略）

配布資料

1　ワーキンググループメンバー表
2　連携ＷＧ第1回会合報告
3　地球惑星科学の連携組織創設のために必要な検討事項メモ

報告事項

1　今回から日本岩石鉱物鉱床学会を代表して大谷栄治氏がメンバーとして加わった．この結果，本ワーキンググループ参加学会は，下記の18学会（会員数合計約27,000名）となった．なお，連携組織設立に向けての準備状況については，今後とも地球惑星科学に関わる学会等に広く情報を公開するものとする．

（参加学会）

日本海洋学会，日本火山学会，日本雪氷学会，日本陸水学会，日本気象学会，日本地震学会，地球電磁気・地球惑星圏学会，日本測地学会，日本惑星科学会，日本岩石鉱物鉱床学会，日本水文科学会，水文・水資源学会，日本地下水学会，日本地球化学会，日本鉱物学会，資源地質学会，日本第四紀学会，日本地質学会

2　地球惑星科学連携のための組織を創設すること，及びこの組織の具体的役割を本ワーキンググループで検討することについては，既に参加各学会の合意が得られていることを再確認した．

3　連携組織の備えるべき基本的機能は以下の４－（３）項に掲げるものとすることで，参加各学会の合意が得られた．但し，これらの全ての機能を創設時に備えるのではなく，参加学会の合意の下に実現可能なものから順次整えていくこととする．

4　ワーキンググループでの議論を踏まえ，連携のための組織の概要を以下のようにまとめ，参加各学会に提示することとした．

（１）組織の名称は「日本地球惑星科学連合（仮称）」とし，対応する英語名はEarth and Planetary Science Union of Japan（EPS Union of Japan）（仮称）とする．
（２）本組織は，地球惑星科学の総合的発展を目的として関連加盟学会の総意の下に創設される，地球惑星科学の連携組織である．
（３）加盟学会は，地球惑星科学全体の発展に関わる下記の機能を本組織に委託するとともに，組織を運営していく上で必要な人材の派遣及び情報の提供が義務づけられる．
　(a) 日本学術会議や総合科学技術会議等の公的機関及び社会一般からの地球惑星科学コミュニティーへの諸要請の受け手としての機能，及びコミュニティーの意見を集約して対外的に発信／公開していく機能．
　(b) 地球惑星科学に関わる国際学協会や国際プロジェクト等への対応機能．
　(c) 地球惑星科学に関わる研究成果の発表及び情報交換のため，地球惑星科学合同大会や国際会議等を企画・運営・開催する機能．
　(d) 地学教育の在り方，地球観測の推進方策，将来的な地球惑星科学発展の方向など，地球惑星科学コミュニティー共通の問題の検討を行う機能．
　(e) その他，地球惑星科学の総合的発展を目的とした諸活動を推進する機能．
（４）本組織は，協議会，理事会，及び事務局から構成される．協議会は加盟学会の代表者から構成され，本組織の基本的運営方針について審議する．理事会は本組織の運営全体を統括し，各理事は（３）項に掲げた各機能を果たすための委員会を組織・運営する．事務局は常勤の事務局長及び職員から構成され，本組織運営に関わる事務を行う．
（５）本組織の運営に必要な経費については，加盟学会からの直接的な貢献（分担金）には依存せず，各加盟学会から提供される情報及び知的生産物に基づいて本組織が編集した広報誌或いは出版物の対価として個人登録会員が支払う年会費（1000～2000円程度）を原資とする．
（６）本組織の設立時期としては，平成17年５月の地球惑星科学合同大会期間中を想定する．

5　日本学術会議改組への対応も考慮に入れると，本組織設立のための準備活動を早急に開始する必要がある．本ワーキンググループとしては，「地球惑星科学連合（仮称）」設立準備会を本年９月に立ち上げることを提案する．この提案については地球物理関連学会学会長等懇談会及び関連各学会で早急に検討をしていただき，設立準備会設置の了承並びに準備会への参加意思について８月末日迄に各学会から回答をいただくこととした．なお，今後の準備作業を効率的に進めるためには，本ワーキンググループを発展させた形で（母体として）設立準備会が設置されることが望ましく，この点に関しても地球物理関連学会学会長等懇談会及び関連各学会の了承をお願いすることとした．

6　学術会議の改組後も学協会の認知要件については従来と大きな変更がないようであるが，その一方で，新たに設置される領域別委員会については，地球惑星科学分野全体で１乃至2となることが予想される．また，学術会議から各学会へのアンケートはこの秋頃に予定されている．こうした状況下で地球惑星科学としてのまとまりを対外的に示すためには，参加各学会の基本的合意が得られて設立準備会が設置された時点で，「設立準備中の地球惑星科学連合（仮称）が地球惑星科学を代表する連携組織として新学術会議立ち上げの対応窓口となる」ことを，各参加学会が学術会議からのアンケートに回答する際に表明していただくことが必要と考えられる．

＜検討内容補足＞

１）組織の名称は，この組織が学会の連合体ではなく，地球惑星科学関連の諸分野の連合をはかるものであることを明確にするために考えられた暫定的なものである．今後，この組織の創設までに参加各学会の意見によって変更される可能性がある．

２）加盟学会に分担金を求めるかどうかについては，様々な観点から検討を行った．各学会の加盟を明確にする意味では各学会から分担金を提供していただくことが必要との意見がある一方で，加盟学会には様々な事情があり，分担金の支出が財政的に困難であるケース，或いは分担金を必要とするなら参加を見合わせるケースもあり得るので，最初から分担金を求めることは難しいのではないかという意見もあった．また，加盟学会の財政事情によって分担金の金額に差を付けるとか，或いは支出可能な金額を申告していただくようなことも考えられるが，学会によって分担金が異なるのは好ましくない等の意見があった．この他，分担金ではなく寄付金ではどうかとの案も出されたが，本組織運用に必要なのは事務局の人件費が主なものとなることから，一時的な寄付金は適切ではないとの反対意見があった．検討の結果，資金面については，当面は加盟学会の直接的な負担は要請しないこととした．但し，組織が整備されてきた段階で，加盟学会の状況に応じた応分の負担をお願いする可能性は留保しておく．いずれにしても，このような基本方針の変更については加盟学会の代表者で構成される協議会等での審議を経るものとし，資金負担が必要となった場合でも，それを強制することはしない．

３）組織創設時の機能は実現可能なものだけとし，創設後に順次整備していくこととする．ワーキンググループで話題に上った検討事項は，地球惑星科学に関わる成果の学術誌による発信，若手研究者の学術研究活動推進のための方策等である．

４）この組織の活動としては，「地球惑星科学」の発展のために，「地球惑星科学」の枠を拡張して，新しい分野を積極的に取り込んでいくことが重要であると考える．従って，本組織の設立準備作業については可能な限りオープンに行い，現在参加していない地球惑星科学関連学会も今後参加することが可能なように留意する．

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します．

第15回地質汚染調査浄化技術研修会―おもにVOC汚染等を対象に―ご案内

第10回まで日本地質学会関東支部が開催し，その後NPO法人日本地質汚染審査機構に引き継がれた，わが国における地質汚染の調査・対策技術の研究開発と発展と普及に大きく貢献した伝統と権威ある技術研修会です．地質・環境・土木・衛生工学等の関係大学院生を受け入れる大学院コースも開設しています．

主　催：NPO法人　日本地質汚染審査機構
共　催：日本地質学会環境地質研究委員会
日　時：**2004年11月４日（木）～６日（土）**
宿　泊：千葉県千倉町スパラダイス夢みさき
参加費：会員（地質学会員含む）67,000円，非会員80,000円，大学院生：52,000円（消費税，宿泊費・食事費・懇親会費込み）．個室は10,000円/泊の追加料金が必要です．また，混雑状況では取れないこともあります．
キャンセル料：無し（～10月28日），参加費の半額（10月29日～11月３日），参加費全額（11月４日～）
定　員：50名(定員になり次第締め切ります．大学院生は最大10名まで)
申込締切：2004年10月28日（木）
申込先：NPO法人　日本地質汚染審査機構
132-0035　東京都江戸川区平井5-11-8-502
Tel：03-5655-6201　Fax：03-5655-6202
E-mail：npo-geopol@nifty.com
URL：http://homepage1.nifty.com/npo-geopol/

受講希望者は，氏名・所属・連絡先（電話，FAX，メール），性別，年齢，部屋の禁煙・喫煙，その他希望についてお知らせ下さい．

シンポジウム「私たちの明日を考える：地球史が語る近未来の環境」

シンポジウムコンビナー：日本学術会議第四紀学専門委員会
主　催：日本学術会議地質学総合研連第四紀学専門委員会
共　催：日本学術会議地質学総合研連環境地質学専門委員会・日本第四紀学会・国際惑星地球年（IYPE）対応国内委員会

テーマ：私たちの明日を考える：地球史が語る近未来の環境
日程：**2004年11月28日（日）**
場所：明治大学アカデミーコモン9階309B

シンポジウムの趣旨・対象・内容

グローバルな地球環境変化や身の回りの環境汚染など，私たちをめぐる環境は，人間活動の影響によって，今大きく変わろうとしています．私たちを取り巻く環境をきちんと理解・評価し，環境の将来像を考えることは，最大の関心事であり，私たちの子孫に対する責任でもあります．

私たちは，今，地球史の中の最後の時代である「第四紀」という時代に生きています．人類が急速に進化したこと，気候がはげしく変動したこと，現在の地形や植生が形成されたことなどから，「第四紀」は，私たちにとって地球史の中で最も関係が深く，重要な時代です．しかも，この時代の環境変化からしか私たちは近未来の地球環境についての展望を得ることができません．こうした重要性のために学際科学としての「第四紀学」「第四紀研究」という分野が成立し，その成果は多くの学術分野から評価されています．

最近20年間に，地球規模の環境変化の研究とも関連して，近い過去の環境復元の精密化が進展しました．環境変化の，いつ，どの程度に．どこで，なぜ起こるか，がくわしく解明されるようになり，われわれの現在の環境評価の基礎がつくられ，将来の環境変化の予測にも役立つ正確度が一段と増加してきています．

今回のシンポジウムでは，数十万年から数十年の様々な時間スケールの自然環境変動の中で，現在の地球環境や地域環境を捉えて，近年の人間活動の影響の評価と，さらに将来の変化を考えます．今回報告される環境変化の内容と扱う時間は，およそ次の三つに分けらます．

1）自然環境そのものの変化（10万年前から）
2）自然環境の変化と人間・社会・文化などへの影響（１万年前から）
3）人類から自然環境への影響：近年の環境問題など（数100年前から）

このシンポジウムでは，広く一般市民を対象に，このような第四紀研究の現在の到達点を示すとともに，現在の変化する環境の中で，人類はどうやって生き延びるのか？　の方向性を探る予定です．また，それを考える科学としての第四紀学の方向性および，第四紀学がどういうふうに現代社会に関われるかを示したいと考えています．

シンポジウムプログラム案

午前（10：00－12：00）
「シンポジウムの趣旨」岩田修二（都立大）
10：00－10：10
1）「過去から知る現在と未来の地球環境と第四紀研究」町田　洋（学術会議）10：10－10：45
2）「氷床コアから明らかになった地球環境変動」藤井理行（極地研）10：45－11：20
3）「氷床変動－海面変動－地殻変動の相互関係と地球温暖化による海面上昇」横山祐典（東京大）11：20－11：55

午後（13：00－17：00）
4）「哺乳類の絶滅史から現在をみる：人類の活動と環境変化がもたらしたもの」河村善也（愛知教育大）
5）「海面変動，人間活動とアジアの大規模三角州」斎藤文紀（産総研）
6）「日本列島における人為的な土地改変」田村俊和（立正大）
7）「溜池や堀の堆積物からたどる都市域の環境変遷史」吉川周作・三田村宗樹（大阪市大）
8）「ハードでソフトな災害対策－火山噴火と大地震の近未来予測」奥村晃史（広島大）
総合討論（全体に関する質疑応答，他分野からのコメント，あるいは将来への提案など）

問い合わせ先：
岩田修二（東京都立大学地理学教室）
電話：0426-77-2591,
メール：iwata-s@comp.metro-u.ac.jp
斎藤文紀（産業技術総合研究所）
電話：029-861-3895,
メール：yoshiki.saito@aist.go.jp

地球惑星科学関連学会2005年合同大会開催のお知らせ

期間：2005年５月22日（日）－26日（木）
５日間
会場：幕張メッセ　国際会議場（千葉県）

大会ホームページ
http://www.epsu.jp/jmoo2005

提案募集セッション：
◆スペシャルセッション
内　　容：旬の研究テーマを学会横断的に議論するセッション
募集締切：**11月１日（月）**
◆ユニオンセッション
内　　容：全学会全般に関係する話題を取り上げるセッション
募集締切：**11月１日（月）**

＜インターナショナル・セッション＞
スペシャルとユニオンセッションでは，インターナショナル・セッションの提案も歓迎しております．このセッションでは全ての発表を英語で行いますので，国際的な研究会などを計画されている方はインターナショナル・セッションでの提案をご検討ください．
ご提案は，大会ホームページトップより，「セッション提案」サイトへお入り下さい．

皆様のご参加，ご提案を心よりお待ちしております．

ご不明な点は，ご遠慮なく合同大会事務局まで御問合せください．

＜地球惑星科学合同大会運営機構事務局＞
tel:03-5841-4291　fax:03-5800-6839
email: office@jmoo.eps.s.u-tokyo.ac.jp

公募　教官公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

信州大学理学部地質科学科教員公募

募集人員：助手１名
研究分野：地層科学
担当教育分野：新生代後半（新第三紀～第四紀）の地層を対象とする野外実習と室内実験，地質調査法実習，共通教育の地学実験・実習
応募資格：
・博士の学位を有するか，着任までに取得見込みの方
・35歳以下の方が望ましい
・地質図を作成して公表したことのある方が望ましい
着任時期：2005年４月１日
提出書類：
１．履歴書
２．研究業績リスト（・査読付き学術誌の原著論文，・その他の論文と報告，・国際会議での発表　などに分類して記述してください）
３．主要論文５編以内の別刷りまたはコピー
４．研究教育歴の概要（1000字以内）
５．着任後の研究および教育の抱負（1000字以内）
６．応募者に関する所見を伺える方の氏名・連絡先
７．本年12月中の連絡先（電話番号，メールアドレスなど）
（選考の過程で，本人に対して問い合わせや面接を行う場合がありますので，ご承知おきください）
応募締切：**2004年12月３日（金）必着**
書類送付および問い合わせ先：
〒390-8621　松本市旭３-１-１
信州大学理学部地質科学科主任　三宅康幸
電話：0263-37-2480　Fax：0263-37-2506
email：ymiyake@gipac.shinshu-u.ac.jp
（封筒に「応募書類在中」と朱書きし，書留で郵送してください）．

詳しい内容については地質科学科の以下のホームページをご覧ください．
http://science.shinshu-u.ac.jp/~geol/

島根大学総合理工学部地球資源環境学科教官公募

１．職名・人員：　助教授（講師）　１名
２．専門分野：　環境地質学
３．応募資格・条件：
・博士の学位を有すること
・野外地質調査の教育・研究指導が可能なこと
・層位学を基礎とした環境地質学の教育・研究が行えること
・大学の管理・運営に積極的に貢献できること
４．担当授業科目：
環境地質学講座と学科共通の専門教育科目の講義・実習等，専門基礎教育科目または共通教養科目の講義を担当する．併せて，総合理工学研究科の講義も担当する．島根大学および地球資源環境学科の教育・研究組織，教育目標，カリキュラムなどについては，それぞれのホームページ（http://www.shimane-u.ac.jp/，http://terra.riko.shimane-u.ac.jp/index_J.htm）をご参照下さい．
５．着任時期：　平成17年4月1日（予定）
６．提出書類：
１）履歴書
２）研究業績リスト（学会などの発表は除く．研究論文については査読の有無を区別のこと）
３）特許，資格など
４）研究についてのこれまでの経過と今後の抱負（1000字程度）
５）教育についてのこれまでの経過と今後の抱負（1000字程度）
６）管理・運営への積極的参加に関する御意見
７）学界での貢献，社会貢献についての実績
８）研究論文の別刷りまたはコピー（掲載予定の論文については受理証明書を添付すること）
９）応募者についてご意見を頂ける方２名の氏名とその連絡先
７．応募締切：**2004年11月30日（必着）**
８．書類送付先：
〒690-8504 松江市西川津町1060
島根大学総合理工学部地球資源環境学科
９．問い合わせ先：
島根大学総合理工学部地球資源環境学科
学科長　赤坂正秀
TEL/FAX: 0852-32-6455
email: akasaka@riko.shimane-u.ac.jp
10．応募上の注意：応募書類は封筒に「地球資源環境学科教官応募」と朱書きし，簡易書にて郵送のこと

千葉大学理学部地球科学科教員公募

１．職名・人数　助教授　１名
２．公募分野
堆積学：堆積学を中心とした基礎的研究または応用的研究を行っている方，あるいは今後このような研究を積極的に行うことのできる方．
３．応募資格
（１）博士の学位をもつ，40歳くらいまでの方．
（２）野外実習指導のできる方．あるいは着任後積極的に指導に取り組める方．
（３）他の教育研究分野と連携し，境界領域の学問分野の開拓を積極的に進めることのできる方．
４．着任時期　2005年４月１日を予定しています．
５．応募書類
（１）履歴書
（２）業績リスト（レフリーを通った論文とそれ以外のものを区別してください．）
（３）主要論文５篇程度の別刷あるいはコピー
（４）推薦状または所見を伺える方数名の氏名・連絡先等．
（５）これまでの教育・研究実績と千葉大学赴任後の教育・研究への計画・抱負などをA4用紙２～３枚程度にまとめて下さい．
６．応募締切　**2004年11月30日（火）必着**
７．応募書類の送付先及び問い合わせ先
〒263-8522千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学理学部地球科学科
E-mail : tito@earth.s.chiba-u.ac.jp
Fax: 043-290-2859
応募書類は必ず書留郵便で，封筒には「公募書類」と朱書して下さい．

なお，地球科学科担当教員は，普遍（教養）教育，ならびに大学院博士課程前期（修士）と後期（博士）の教育にも携わっていただくことになります．

筑波大学大学院生命環境科学研究科教官公募

１．職名・人員：大学院生命環境科学研究科地球進化科学専攻（地球変動科学分野）助教授１名
２．採用分野：地球変動科学（構造地質学，テクトニクス）
３．採用予定：決定後可能な限り早い時期（2005年４月１日発令を希望）
４．応募資格：１）博士の学位を有すること
２）地球変動科学分野で，地球変動科学，構造地質学，テクトニクスなどの教育・研究に従事できる方

5．担当予定：大学院（地球変動科学特論，地球史解析学特別講義，地球史予測学特別講義など），自然学類（理学部に相当）（構造地質学，同実験，同演習，地球進化学など）
6．提出書類：以下の書類をＡ４版にて作成すること．
1）履歴書（市販の用紙使用，学位明記，署名捺印，写真貼付）
2）研究業績目録（審査付き論文，著書，その他報告に区分して記載）
3）主要業績５ないし10編の別刷（原則として最近５ヵ年の業績を含む代表的なもの５ないし10編；コピー可）
4）教育・研究活動の概要（2000字程度の自由形式）
5）教育・研究活動に対する抱負（2000字程度の自由形式）
7．募集締切：**2004年12月１日（水）必着**
8．提出先：〒305-8572　つくば市天王台1-1-1　筑波大学大学院生命環境科学研究科地球進化科学専攻長　指田勝男　宛（＊封書に「応募書類在中」と朱書し，簡易書留で郵送のこと）
9．照会先：筑波大学大学院生命環境科学研究科地球進化科学専攻
　小川勇二郎
Tel: 029-853-4307
E-mail: yogawa@arsia.geo.tsukuba.ac.jp

九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門教授

1．職種・人員　固体地球惑星科学講座担当教授　１名
2．専門分野　　固体地球物理学（地球内部の構造やダイナミクスの研究を固体地球物理学的手法（地震学，測地学，地球電磁気学等）によって研究し，かつ教育に熱意のある方を希望）．
3．着任時期　2005年４月以降（決定後なるべく早い時期）
4．提出書類
（1）履歴書
（2）これまでの研究概要（A4用紙2枚以内）
（3）研究業績リスト ¦原著論文（査読の有無），総説，報告書，著書に区分¦
（4）主要論文の別刷3編（研究業績リストに○印を付す）
（5）研究・教育に対する抱負（Ａ４用紙２枚以内）
（6）応募者を熟知し，意見を聞ける方２名の氏名とその連絡先並びに応募者との関係
5．公募締切　**2005年１月28日（金）（必着）**
6．書類送付先および問い合わせ先
〒812-8581　福岡市東区箱崎6-10-1
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門固体地球惑星科学講座担当教授候補者選考委員会
委員長　中田　正夫
Tel: 092-642-2515（ダイヤルイン）
Fax: 092-642-2684
E-mail: mnakada@geo.kyushu-u.ac.jp
7．その他
（1）提出書類のうち，（4）以外は全てＡ４用紙を使用すること．
（2）封筒に「応募書類在中」と朱書し，簡易書留で郵送のこと．
（3）選考の最終段階において講演をお願いし，面接を行います．

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします．推薦ご希望の方は締切日半月前までに，理事会までお申し込み下さい．

平成17年度「とやま賞」候補者推薦募集

1　「とやま賞」の趣旨
現在の活動実績がすぐれ，かつ，富山県の将来を担うにふさわしい前途有為な人材の育成に資する．

2　候補者の条件
（1）富山県出身又は富山県内在住のもの
（2）学術研究，発明発見（技術開発・応用を含む），芸術文化，スポーツ等の分野において，すぐれた業績を挙げ，かつ，将来の活躍が期待される個人又は団体
※なお，年齢は原則として45歳（平成17年５月９日現在）までとするが，人文・社会科学系についてはこの限りではない．また，大学・研究機関等にあっては助教授クラスまでとし，教授は含まない．

3　提出書類等
（1）平成17年度「とやま賞」候補者推薦書
（2）財団が特に指定する提出資料
※提出書類の様式は，WORD形式とPDF形式でダウンロード可能．但し，e-mailでの提出は受付けない．

4　推薦締切　**2004年12月８日（水）必着**

5　送付先
（財）富山県ひとづくり財団　事務局あて
〒930-0018　富山県富山市千歳町１－５－１
富山県教育記念館２Ｆ
※お問い合わせ等は
　電話　076-444-2000
　FAX　076-444-2001
　e-mail　masuoka@t-hito.or.jp
　URL　http://www.t-hito.or.jp

報　告

本会委員会以外の研究会・委員会等よりのお知らせを掲載します．

日本学術会議第19期第３回地質学研究連絡委員会議事録

日時：2004年５月31日（月）14：00－15：45
場所：日本学術会議　第６部会議室（６階）
出席者：小松正幸（学術会議会員），町田洋（学術会議会員），井内美郎，小山内康人，小坂和夫，笹田政克，鈴木和博，高木秀雄，玉生志郎，西脇二一，前田晴良，吉岡龍馬
欠席者：巽　好幸，徳山英一

議題
1．前回議事録の確認
第19期第２回の議事録案が示され，承認された．

2．学術会議報告（小松会員）
ア．日本学術会議は４月20日に声明文「社会との対話に向けて」を発表した．
この声明では，まず科学者と社会との共同の必要性を訴えた．特に人類の将来を担う子供たちとの対話を通じて子供たちの科学への夢を育てることが重要としている．そして，日本学術会議はそのためのあらゆる可能な行動を行うことを声明した．
イ．日本学術会議の新体制に関する現在の状況について報告された．説明および議論の概要は以下の通りである．
・４月20日の総会，部会において，事前の意見聴取と回答に基づく，新しい学術会議のあり方に関する議論がされたが結論は持ち越された．４月28日に組織制度常置委員会から意見聴取の依頼が再度あった．
・第４部では，これに対する意見を集約した．
・５月20日の運営審議会で，５月中に新会員選出のための「選考委員会」（30人）（学術会議会長，学士院院長，総合科学技術会議議員の３名によって選出される）が設置される見込みである．さらに，新会員候補選出の責任者である現会長に助言するための「日本学術会議新体制懇談会（仮称）の設置が了承された．そこでは新しい学術会議の会員選考手続きや課題別委員会，領域別委員会のあり方，それらとの学協会との関係等について議論されると予想される．一方，学術会議内には組織・制度常置委員会があり，会員の意見の集約を行っている．従って，会員選出のあり方を議論しているさなかに会員の選考が行われてしまうという事態が憂慮される．
・総合科学技術会議は，「現学術会議は新しい学術会議の制度をつくる立場にない」と

言っているが，現学術会議の組織・制度常置委員会は，「現学術会議が次期の組織体制やあり方を規制すべき」との考え方をしている．
・学協会と学術会議の連携のあり方については今後，模索・検討する必要がある．
・研連は国際学術団体との連携をはかる国内委員会の役割もあるが，これをどのように継続するか検討する必要がある．
・学術会員は，俯瞰的会員（70人程度）と領域会員（140名程度）とになる
・今までは研連が対応してきた役割を，領域会員の中に専門委員会を設置することで対応できないか．
・学術会議の見直しの中で，ボトムアップの要求実現を図るルートがなくなる可能性があり，厳しい状況がある．

3．国際惑星地球年（IYPE）の取り組みについて
・国際惑星地球年（IYPE）対応日本実行委員会準備会（５月14日）の議事録を紹介した．
・実行委員会事務局は，産総研地質調査総合センターが対応することとなった．
・古生物研連の10月シンポジウムもこの行事の一つと位置づけさせてほしい旨，申し入れがあった．
・国際惑星地球年（IYPE）のロゴ使用はフリーである．
・各学会での取り組み状況を報告しあった．

4．国際惑星地球年（IYPE）対応日本実行委員会の立ち上げ
６月下旬に立ち上げる予定で取り組む．日程は６月28日予定．

5．地質研連としての「理科離れ」，「基礎科学振興」，「国際惑星地球年」に対する対応アンケート結果
アンケート集計結果について紹介された．

6．科研費関連
第１段と第２段の審査委員候補が確定し，推薦した．

7．今年11月に予定している高知大での国際ゴンドワナ・シンポジウムについて，地質研究連絡委員会への共催依頼があった．審議の結果，了承された．

8．その他
理科離れに関連した取り組みとして，地球惑星関連合同大会での特別公開セッション「新しい地学教育の試み－地球惑星科学からみた高校地学へ－」が紹介された．

次回　10月18日（月）予定

CALENDAR

2004.10～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会行事．

10月　October

○日本地震学会秋季大会
10月９日（土）～11日（月）
場所：九州大学
http://wwwsoc.nii.ac.jp/ssj/index.html

○石油技術協会平成16年度秋季講演会
10月26日（火）
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
http://www.japt.org/

○日本応用地質学会研究発表会
10月28日（木），29日（金）
場所：新潟ユニオンプラザ
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jseg/index.html

11月　November

○TECNO-OCEAN 2004 IN KOBE
11月９日（火）～12日（金）
場所：神戸コンベンションセンター（神戸市）
http://www.oceans-technoocean2004.com/

○2004年世界アスベスト東京会議
11月19日（金）～21日（日）
場所：東京・早稲田大学国際会議場
http://park3.wakwak.com/~gac2004

○第30回リモートセンシングシンポジウム
11月１日（月）～２日（火）
場所：日本科学未来館・みらいCANホール・会議室
http://www.sice.or.jp/bukai_web_appli/sindex.html

○第19回「大学と科学」公開シンポジウム　ここまで進んだ日米の都市地震防災
11月２日（火）～３日（水）
会場：仙台市情報産業プラザ
http://www.uni-science.org

○第15回地質汚染調査浄化技術研修会
―おもに単元調査法を基本としたVOC汚染調査を対象―
11月４日（木）～６日（土）
場所：千葉県千倉町スパラダイス夢みさき
http://homepage1.nifty.com/npo-geopol/

○第５回こどものためのジオ・カーニバル
11月６日（土）～７日（日）入場無料
会場　大阪市立科学館
http://geolo.sci.osaka-cu.ac.jp/geo/index.html

○第49回日本水環境学会セミナー
「水環境を考えるために地理情報システム（GIS）を活用する」
主催：（社）日本水環境学会
11月９日（火）
場所：東京大学弥生講堂「一条ホール」
E-mail：tamura@jswe.or.jp

○平成16年度第２回　建設技術者のための地質学教養セミナー
「地球の過去・現在・未来」
11月12日（金）
会場：建設交流館８Ｆ　グリーンホール
連絡先：断層研究資料センター
fred_c@orange.livedoor.com

○第20回ゼオライト研究会
11月30日（火）～12月１日（水）
場所：タワーホール船橋
http://wwwsoc.nii.ac.jp/zeolite/index.html

12月　December

☆第14回環境地質学シンポジウム
日本地質学会環境地質学研究委員会
12月４日（土）～５日（日）
場所：東京大学農学部２号館
http://www.bekkoame.ne.jp/~jcenvgeo/

○第28回日本フィッション・トラック研究会
12月12日（金）～12月13日（土）
場所：白山里（石川県石川郡吉野谷村）
http://wwwsoc.nii.ac.jp/ftrgj/

○地質学史懇話会総会
12月23日（木・祝）13：30～17：00
場所：北とぴあ（JR京浜東北線王子駅下車）
内容：鈴木尭士氏「寺田寅彦」
山田俊弘氏「ステノ」
http://www.geocities.com/jahigeo/jahigeo51.html

2005年

１月　January

○日本古生物学会第154回例会
１月21日～23日
場所：山形テルサ（山形駅前）
http://ammo.kueps.kyoto-u.ac.jp./palaeont/

紹　介

日本の地形６
近畿・中国・四国

太田陽子・成瀬敏郎・
田中眞吾・岡田篤正　編

東京大学出版会　2004年６月発行，A5版，
410ページ，定価7,140円（税込），
ISBN 4-13-064716-4

本シリーズは，全国を網羅した地形誌であり，総説と６つの地区各１巻ずつの全７巻から構成されている．総説，北海道，関東・伊豆小笠原，九州・南西諸島が既に出版済みであり，５巻目としてこのたび近畿・中国・四国が刊行された．日本の自然や地理について全国をまとめたシリーズ本はいくつかあるが，このシリーズは地形の形成史にこだわっている．断層運動や火山活動を含めた地殻変動，氷河性海水準変動及び気候変化に関連した環境変化，人間活動の影響などによる一連の地形形成プロセスを通して，現在みられる地形をその一断面としてとらえる動的な見方がなされていて，大変興味深い．日本列島全体に及ぶ大地形から極めてローカルな地形にいたるまで，また日本列島の枠組みができ始めた第三紀以降から，地殻変動や気候変動が活発化した第四紀，人間活動の影響が明瞭に現れる歴史時代といったさまざまな時間スケールで地形形成が語られている．

本巻は総勢21名によって執筆されている．章立ては以下のとおりである．１-総説，２-近畿三角帯，３-内帯山地とその周辺，４-日本海沿岸，５-瀬戸内地域，６-中央構造線とその周辺，７-外帯山地とその周辺，８-外帯の海岸，９-近畿・中国・四国の地形発達史．多数の地形図や写真などが掲載されているほか，各章の最後にはいくつかのトピック的なことが１～２ページにまとめられたコラムがついている．地形各論の中で詳しく触れられている点，興味を持った点を以下にいくつかあげてみよう．

近畿三角帯から中央構造線沿いの地域には，多数の活断層や構造性の堆積盆地と細長い山地があり，代表的な地形区のひとつを構成するとともに，古くから多くの調査・研究が行われてきた．また兵庫県南部地震以降，この地域では活断層調査や地下構造調査が集中的に行われ，活断層の性質や盆地地下の構造などがかなり詳しくわかってきた．本書では，これらの最新の資料を多数盛り込んで，地形発達史が語られており，大変充実した内容となっている．一方，播磨灘から西の瀬戸内海周辺地域には，比較的大きな海岸平野が散在するが，これらの地域でのこれまでの研究対象は主に沖積層であり，近畿地方での盆地深部の地層まで研究されている点とは対照的であることをあらためて認識させられた．また瀬戸内地域で多数の段丘が発達する地域は少ないが，播磨灘の北東岸台地では最大20段にも及ぶ段丘面が識別されていて，厚い地層堆積の沈降場から隆起場に変化した過程，氷河性海面変動との対応などを明らかにする上で非常に興味がもたれる地域である．瀬戸内海の海底地形については，潮流や底質などとともにコンパクトにまとめられている．

中国山地にみられる侵食小起伏面については，その形成時期や形成機構などが古くから論じられていたが，具体的な年代を示すデータに乏しかった．最近になって山地内に分布する地層の年代測定値が増加し，それらを元に本書ではかなり詳しい説明や議論がなされている．また山麓地形についても，広域テフラを用いて細かな分類や発達史が述べられている．これとは逆に四国や紀伊半島の山地では基準となる地層が少ないために，河川による侵食の議論が主体になっている．第四紀の火山は内帯山地側に大山，三瓶山のほか多くの単成火山があり，広域テフラや多くの年代測定値とともにわかりやすくまとめられている．山陰海岸平野の発達については，特に人間活動による土砂の増大を含めて述べられている点が注目される．太平洋沿岸に発達する海成段丘については，かなり網羅的に詳しい説明がなされている．

執筆者各人がそれぞれの分野あるいは地域のスペシャリストであり，また対象とする地域内のできるだけたくさんの範囲を細かくカバーしようという意図があって，非常に濃い内容となっている．特に著者の考え方だけではなくて，これまでの研究などもレビューされているため，地形研究の着眼点や研究史の理解にも役に立つ．ただ，その分一地域の記載スペースが制限され，場合によっては十分な説明ができないでいるところもあるように思われる．これらの点は，全体的な説明を行っている第１巻の総説を参考にしながら読み返してみて，さらに引用されている個々の文献に当たることでより理解を深めることができるであろう．本書は，現時点での近畿・中国・四国の最新の資料を取り込んでまとめあげた地域地形誌であり，どちらかといえば教科書あるいは辞書として使いたいものである．またこれから地形や第四紀地質，環境地質等の研究を行うにあたって，どのような点，どのような地域に着目すればよいかというテーマを見出す参考書でもある．シリーズものは全て揃えないと気がすまないという人を別にして，この１冊だけでも十分価値のある本であると思う．多くの地形・地質学関係者に一読をお薦めしたい．

（水野清秀）

ジオロジストのための

法律メモ

著作権譲渡等同意書の解説（1）

弁護士　高木宏行

学会では，2002年12月14日に前平　朝彦会長名で「著作権譲渡等同意書への署名捺印のお願い」と題する書面を発表し，「地質学雑誌」「地質額論集」「リーフレット」等の出版物に受理された原稿については，その著作権を学会に譲渡する取扱いをしています（2002年12月号News誌参照）．

そのような処理をする目的については，上記のお願いや平前会長の「情報発信における学会の著作権管理と倫理責任」に詳細に述べられています．

ここで譲渡される著作権とはどのようなものかについてですが，著作権法全般の解説となると大変ですので，このコラムでは，ご使用いただく著作権譲渡等同意書（以下「同意書」といいます．）の意味を解説する中で必要な事項をご説明をしていきたいと思います．

同意書を見て頂くと「著作権」という言葉の他に「著作物」や「著作者」といった用語が出てきます．同意書を理解するためには，まずこれらの言葉の意味が分からなければなりません．そして著作権とは何かを理解するには，まず，権利の対象となる著作物について理解しておく必要があります．そこで，まず著作物についてからお話していくことにします．

＊1　民法85条　本法ニ於テ物トハ有体物ヲ謂フ．

「著作物」という用語には「物」という語が使われています．普段，我々が「物」と言うときには，形がある物，見たりさわったりできる物を意味しています．このような意味での「物」を有体物といいます（民法85条[*1]）．そうだとすれば，著作物というのも音楽が録音されているCDやMD，小説が記載されている本，あるいは論文が掲載されている雑誌を著作物という，ということになりそうですが，そうではありません．

著作権法２条には著作物についての定義があります．それによれば著作物とは「思想または感情を創作的に表現したものであって，文芸，学術，美術又は音楽の範囲に属するものをいう．」とされています．この条文にある「表現したもの」の「もの」というのはCDや本や雑誌をいうのではなく，表現そのものということを意味しています．つまり，ここでいう「もの」とは有体物をいうのではなく，無体物を意味しています．

また，「表現」したものである必要がありますので，頭の中で考えただけのものは著作物にならず，何らかの「表現」がされている必要があります．文章を頭のなかで組み立てただけではだめで，書いたり，話したりして表現する必要があります．

（次号へ続く）

弁護士　高木宏行
（キーストーン法律事務所）
日本地質学会顧問

第二東京弁護士会所属
現在　東京弁護士会・第二東京弁護士会合同図書館嘱託，（財）日弁連交通事故相談センター東京支部　副委員長

表紙紹介

シドニー・アーガイルカットの砂岩露頭

写真・文　**貴治康夫**（大阪府立箕面東高等学校）

シドニー市はNew England Fold Beltの西翼側に発達した三畳系が広範に分布するSydney Basinの東部に位置する．オーストラリア第一の大都会であり，シドニー港は世界でも有数の美港で知られる．

1788年１月26日，初代総督アーサー・フィリップはイギリスから流刑囚を含む大移民団を率いて，ポートジャクソン（シドニー湾）の入り江に最初の居住区を建設した．移民達は周辺一帯の堅固な砂岩の岩山を削りながら街づくりを進めた．当時の岩山の存在は，ロックス（The Rocks）とよばれる地名や，この区域がシドニー市内で最も標高の高い場所であることからも偲ばれる．

現在，ロックス地区のなかほどを東西に走るアーガイル通り（Argyle street）とハーバーブリッジへと続くハイウエイが交差し，トンネルになっているところがある．ここがアーガイルカット（Argyle cut）とよばれる切り通しで，高さ約10m，距離100mほどにわたって続いている．流刑囚達はハンマーとつるはしによる重労働を強いられながら，岩山を切り開き，道路を建設した．崩された砂岩の岩塊は港の埋め立てに利用され，完成までに1843年から十数年の歳月を費やした．崖には当時のつるはしの跡が今も残っている．

シドニー市内の古い建造物には，この周辺の砂岩が石材としてよく使用されている．Sydney sandstoneの名で知られ，ニュージーランドの建造物にもみられる．

表紙写真はアーガイルカットの南側の一部分である．岩片やマトリックスの少ない淘汰の良い石英質の砂岩の表面には長年月の風化によって浮き彫りになった，さまざまな堆積構造を観察することができる．斜交層理が東あるいは西へ傾斜するヘリンボーン構造（herringbone structure）は，潮汐の影響を受ける沿岸域であったことを示している．浅海での嵐を物語るハンモック状斜交層理（hummocky cross stratification）も認められ，堆積相的に興味深い．紀伊半島・田辺層群（中新統）の露頭を髣髴とさせる．このような露頭はロックス地区の随所で見られる．

特集　The 32nd International Geological Congress 2004 in Florence（IGC : 2004）

第32回IGC（フィレンツェ）の開催ならびにIUGSとIGCの統合

佐藤　正（深田地質研究所，前IUGS副会長）

2004年３月20日から28日までイタリア・フィレンツェで第32回万国地質学会議（International Geological Congress, IGC）の本会議が開催された．本会議の前後に恒例の地質巡検があるから，正確には最初の会期前巡検が始まった８月10日から最後の巡検が終わった９月４日までの間が今回の会期である．なおこれ以外に６月21日－７月６日にパキスタンからカラコルムーヒンズークシを往復した特別な巡検Prestige Field Tripがあるので，これを入れれば会期はもっと長くなる．今回のIGCは「地中海地域から汎世界的な地質学のルネッサンスに向けて」という標語を掲げて行われたが，これはフィレンツェがルネッサンスの中心地であったことを寓意しているのであろう．

なお後に詳しく述べるように，今回の会議を期に，IUGSとIGCが合体の第一歩を踏み出した．これまではIGCとIUGSは別個の組織であったものが，少なくとも最高議決機関である評議会を統合して，一つの団体として地質学者のコミュニテイを代表することになった．

第32回IGCの概略

本会議はフィレンツェ旧市街の北部にある旧城塞Fortezza da Bassoに設けられているコングレスセンターを全面的に使って行われた．８月25日のIUGS／IGC合同評議会で組織委員会が報告したところによると，登録者総数7,010人で，内訳は正規の会員4,494，学生会員1,236，同伴者600，ジオホスト680であった．このうちイタリアからの登録者数は1,446人，それ以外の5,564人は国外からの登録者であった．登録者の多かったのはイタリアに次いでアメリカ合衆国，ロシア，中国の順で，日本は中国についで346人であった．実際の参加者は会議直前の８月19日の段階で6,500人くらいという報告があった．

日本の代表は巽好幸（首席代表），井上大榮，斉藤文紀，高木秀雄，田崎和江，土　隆一，西脇一二，波田重熙，および欠席者があった時の代理として井内美郎の諸氏であった．

科学的なプログラムはSpecial Symposiumが14，Topical Symposiumが38，General Symposiumが24たてられ，この中に設けられたセッションは全部で336になった．全部で口頭発表は3,500件，ポスター発表は4,650件にのぼった．これらはすべて上記の会場内で行われた．このほか特別講師による８回の全体講演会が開かれている．日本からの発表の数は分からないが，アブストラクト集CD-ROMで検索するとタイトルにJapanの語が入っているものは273件あった．タイトルにJapanの語が入っていない日本人の発表がこれ以外にもあることが予想されるから，およそ300件程度の発表が日本人によって行われたであろうと推定される．

巡検は当初地中海地域を中心に102コースが設定されたが，申し込み者が少なくキャンセルが相次ぎ，最終的に実施されたのは30コースに過ぎなかった．参加者総数は登録者集のほぼ10％程度が通例で，今回も870人にとどまった．巡検はIGC定款に定められている必須の行事であるが，これへの参加者の減少傾向は検討すべき問題である．日本人の参加者数は分からない．

これ以外にもIGC恒例の行事として，GEOEXPO，Workshop，Short Course，Youth Congress，Science Theatre，Film Festivalなどが平行して開催された．会期中毎日「32nd IGC Informs」と題する新聞が発行されていた．また恒例のSpendiarov賞とともに，今回新しく設けられたSella賞の贈呈も行われた．

財源の最大のものは登録料で，それにイタリア政府を始め種々の団体からの寄附を得て会議が行われた．支出総額は8月25日の報告によれば，およそ450万ユーロに達するとのことであった．

フィレンツェIGCでの新しい運営方法

イタリアの組織委員会は当初から会議の運営をできるだけ電子的に行うことを計画し，サーキュラーの配布，登録受け付け，講演申し込みの受理，アブストラクトの提出と審査ならびに訂正，巡検の受付，ホテルの予約など多くの事務をオンラインで行った．当初システムがやや不安定なことがあったが会期が近づくにつれて安定し，会期中には大きなトラブルは起こらなかった．中でも注目すべきは講演を電子的に集中管理するシステムを採用したことである．講演者はあらかじめ講演内容をPowerPointで書いたものを用意し，それをスライドセンターでホスト・コンピューターにコピーするだけで，それをネットワークで結ばれた各会場で開いて映写するようになっていた．スライドセンターには十数人のアシスタントが待機し，講演者がコピーするのを助けていた．問題があった場合や特別なソフトウエアを使用したい人にも的確に対応していた．このシステムはボローニャに本拠を構える大学間コンソーシアムCINECAが独自に開発したということである．会場に置かれていたのは端末のほかは緊急時のためのOHP機器だけである．筆者の見た限りでは大多数はこのネットワークを使って講演内容を映写していたが，OHPを使って発表を行った人も少数ながら存在した．

このほかにもいくつか新しい試みがされた．途中に挟まる土・日曜日も休みにせず，会期を実質７日間に縮めたこと，登録料の中に昼食代を含めて会場内で昼食を提供したこと，アブストラクト集を数値化して1枚のCD-ROMに納めて配布し，印刷したものは希望者のみに有料（非常に安価）で配ったことなどである．これらは今後のIGCの運営形態に大きい影響を与えることになろう．

IUGSとIGCの統合

これまでIGCと国際地質科学連合（International Union of Geological Sciences, IUGS）とは別個の組織であった．IUGSは分担金を支払って加盟した加盟国あるいは地域から成り立っている公的な学術団体であるが，IGCは初回から会議ごとに任意の人々が集まる学術集会の性格をもち続け，現在でもそうである．その組織運営は開催国が指名する組織委員会に完全にまかされており，IUGSはこれに関与することはなかった．このことは案外知られておらず，地質学者の間でさえもIGCがIUGSの学術大会であるかのごとく誤解している人が多かった．両者が別の団体であることがもっともよく表れるのは，各IGCに際して開かれる評議会である．IUGSもIGCもそれぞれ自分の評議会をもっており，最終的な意志の決定はこの評議会が行ってきた（IGCは総会の批准を必要とする）．IUGSの評議会はIGCで人が集まる機会を利用してIGCの会期中に行われるので，各国はIUGSとIGCの二つの評議会にそれぞれ別の代表団を送らねばならなかった．しかし，ほとんどの代表団はほぼ同じメンバーでできていた．もともとIGCには加盟国というものはなく，組織委員会はIGC評議会への代表の派遣要請をどこに出していいのか苦慮するこ

ともあった．ふつうはIUGSの窓口機関に送られていたが，IUGSに加盟していない国ではアカデミーや地質調査所などのようなその国を代表する機関に送られることが多かった．さらに，ことを複雑にしたのは代表の数で，IGC評議会への代表の数はIUGSへの分担金のカテゴリー数となっていた．このように二つの団体が互いに独立しているにもかかわらず，相手の運営形態の一部を利用しあうといった混乱がますます両者の関係をわかりにくくしていた．

そもそも，IGCは会議ごとに存在するだけで会議の間の4年間は存在しなかったから，この間は世界の地質学者を代表する機関は存在しなかった．（Steering Committeeと称する委員会が会議間も存在したが，これは連絡機関の域を出なかった．）このため恒常的に地質学界を代表する機関の必要性が認められるようになり，1961年になってユネスコの要請もあってようやく国際学術連合体としてIUGSが設立された．IUGSはICSUに加盟し，きちんとした組織形態をもっている．公的な住所も定められており，運営も評議会で選出される執行委員会が行う．日本は日本学術会議が分担金（アメリカおよびロシアと並んで最高額のカテゴリー8）を支払って加盟している．

古いが自然発生的にできたIGCと歴史的には後発のIUGSとの関係はかならずしも明確ではなかった．IUGSの定款にはIUGSはIGCの科学的スポンサーになると書かれているが，スポンサーという語の意味は必ずしも明確でなく，実質的にIUGSがIGCの企画運営に口を挟むことはなかった．

リオデジャネイロでのIUGS評議会での決議を受けて設置されたIUGS戦略的行動計画委員会（IUGS Strategic Planning Committee）がまとめた32ヶ条の勧告の中に，IUGSとIGC両者の関係をより明確にすることという項目があり，筆者はその実行案作成の担当となった．当初から両者の間に密接な関係を築くためには両者を統合するのが最善であると考え，その考えに沿った素案をIUGS執行委員会に提案していた．この提案は執行委員会の支持を受け，2002年の秋になってIGC関係者との協議が実現し，ここで大筋でIUGSとIGCが統合に進むことが合意された．統合に伴って必要となる定款改訂案は2003年秋まで完成し各加盟国に送られ，今回のIUGSおよびIGCの評議会で審議されるにいたった．それが今回両評議会で承認された定款改訂案である．

両者の統合には，まずそれぞれの最高意志決定機関（IGCでは総会，IUGSでは評議会）で定款の改訂を決議する必要があったので，今回のIGCの開会に先立つ8月20日の午前中に，相次いでIGCの評議会（午後に総会で批准）とIUGSの評議会が開かれ，それぞれ定款の改訂が承認された．こうして第1回IGC以来126年を経てようやく地質学界を唯一の組織が恒久的に代表することになった．これ以後，IUGSとIGCは合同して一つの評議会を開くことになり，その第1回が8月25，26の両日に開かれた．

新しいIUGSの定款は8月20日のIUGS評議会に提案されたものであるが，まだ印刷公刊されていない．近日中にIUGSのウエブサイトに全文が掲載されるはずである．IGCの新定款は第32回IGCの第3サーキュラーに新定款案として掲載されている．これがそのまま新しい定款となる．

IGCの新しい位置

統合に際しては，新しい組織の中でのIGCの位置がIUGS執行委員会，IGC Steering Committee，定款改定委員会で激しく議論された．いくつかの点で委員間に意見の相違があり，完全な合意は得られていないが，大筋で統合に向かって踏み出すことが了承された．その際，IGCの長い歴史を尊重してその自主性を維持することが合意され，以下の基本方針に基づいて定款改訂や組織改編を行うことになった．

1．IGCはIUGSの科学的フォーラムであると定義する．
2．IGCの名称と番号はその歴史を尊重してそのまま保持する．
3．IGCの計画・運営はこれまで通り開催国がつくる組織委員会が自主的に行う．
4．IGCとIUGSの評議会を合体し，これを両者の最高意志決定機関とする．
5．IGCの総会は廃止する．
6．IGCに関する用務を処理するため上記評議会の下にIGC委員会を設置する．この委員会はIUGS執行委員会，IGCのSteering Committeeの双方を代表する委員で構成される．

今回承認された新しい定款には，IGCはIUGSの学術大会であるというはっきりした定義が与えられている．しかし依然IGC組織委員会はautonomyを保持し，両者を統合した評議会にのみ従属することになっている．したがってIGCはIUGSの一機関ではない．これはIUGSとIGCの統合がその第1歩を踏み出したことを意味するが，完全に統合されたわけではないことを示している．

この定款にもとづいて第1回の評議会は8月25日と26日の午前に開かれ必要事項を審議した．この中には，次期役員の選出や次回IGCの開催地などの選定も含まれている．その結果は以下に述べる．なお，このような大幅な規則の改訂にはありがちなことであるが，規則に不備な点が少なくないことがすでに明らかになっているので，その補完のための改訂作業をIUGS執行委員会で始めることになっている．

次期IUGS役員

今期のIUGS執行委員の任期はこの評議会で切れた．次期執行委員は新しい合同評議会で以下のように選出された．任期は次回評議会（2008年オスロIGCにおいて開催）までである．

President: 張宏仁（Zhang Hongren），中国
Secretary General: Peter Bobrowsky, Canada
Treasurer: Antonio Brambati, Italy
Vice President: Eldridge Moores, USA
Vice President: Sylvi Haldorsen, Norway
Councillor（任期2004-2008）: 松本良, 日本
Councillor（任期2004-2008）: Gabriele Schneider, Namibia
Councillor（任期2006-2010）: Mikhail Fedonkin, Russia
Councillor（任期2006-2010）: Marta Mantovani, Brazil

なお，2002-2006年の任期をもち現在Councillorである次の2名はそのまま留任する．

Councillor（2002-2006）: Jean-Paul Cadet, France
Councillor（2002-2006）: Alberto Riccardi, Argentina

なお，Councillorの半数が任期の途中で交代する制度は今期から行われている．

次回IGC開催地の決定

次回2008年開催のIGCは，ノルウエーとエジプトが招致の意向を表明していた．評議会における意向表明のあと投票が行われ，次回はノルウエーのオスロ市で開催することが決まった．

また今回からその次の開催地も決めることになっていたが，2012年開催のIGCはオーストラリア，モロッコ，インドおよびアイルランドが立候補し，同じく評議会で意向表明が行われたあと投票が行われ，オーストラリアのブリスベーン市で開催することになった．

IGCの開催は開催地の地球科学界に大きい刺激を与えるだけでなく，地域の経済界にも大きい影響を与えることが次第に知られるようになり，誘致運動はオリンピックの誘致のように地元を巻き込むようになってきた．今回も各招待国は熱心に投票の呼びかけを行っていたようである．

なお，IGCが偏りなく世界の各地で開催されるよう，世界をいくつかのブロックに分けて回り持ちにするというローテーション・システムを採用することが新定款には謳われている．しかし具体案は運営委員会で審議されたが，最終案ができるにいたらず，評議会で審議されることはなかった．

今回のIGCは成功であったと評価するむきが多かった．これはひとえにイタリア組織委員会の努力によるもので，ここに敬意を表したい．　以上

Report 1　第32回IGC（フィレンツェ2004）オフィオライト関係セッション見聞録

石渡　明（金沢大学理学部地球学科）

今回のIGCではトピックT27「オフィオライトと海洋リソスフェア」の下に６つのセッションが４日間にわたって同じ15番の部屋で行われた．８月21日はボルトロッティとディレックが世話人の「テーチス造山帯のオフィオライトと縫合帯」（T27.05（#13），オーラル18件，ポスター19件），22日はラガブリエルとマロニによる「オフィオライトの定置テクトニクス」（T27.03（#58），オ５，ポ７）及びフラワーとピアスによる「オフィオライトの火成岩成因論」（T27.01（#76），オ14，ポ15），23日はボディニエ・ランポーネ・スカンベルリによる「海洋リソスフェアの進化におけるメルトと流体」（T27.02（#105），オ９，ポ10）及びムアーズとスパデア（欠席）による「先カンブリア紀及び前期顕生代における海洋底岩石の記録」（T27.05（#127），オ10，ポ５），そして24日はブルーマーと小川勇二郎による「環太平洋造山帯のオフィオライト」（T27.06（#148），オ９，ポ５）があり，プログラム上の発表数は計126だが欠席が１～２割あった．私とマルバスと石塚英男が世話人だった第29回IGC（京都1992）オフィオライトセッション（オ21，ポ10，要旨18，計49件，オランダVSP社から1994年に論文集出版）の数倍の規模である．

日本人の発表は，#76の宮下純夫（オマーンの斑れい岩），榊原正幸（空知緑色岩の液体不混和），佐野　栄（同前），山崎　徹（オマーンの海嶺→島弧火成岩），#127の石渡明（招待：環太平洋オフィオライトのOs同位体），#148の安間　了（チリ・タイタオ），前川寛和（環太平洋青色片岩帯の蛇紋岩と交代岩），宮下純夫（北海道），藤岡換太郎（２件：母島海山の成因；蛇紋岩海山の多様性），植田勇人（２件：大町海山のエクロジャイト；北海道），小川勇二郎（前弧の蛇紋岩・玄武岩・変成岩組合せ）があった（第一著者名とトピックのみ掲載）．全体では，拍手喝采を浴びた優秀な発表から新味のない総説原稿棒読みの呆れた発表まであったが，日本人の発表は総じて好評だった．

写真２．フィンランドの約20億年前のヨルムア（Jormua)オフィオライトについてポスター発表するIrmeli Mänttäriさん（23日，T27.05, #127-11, Booth 453）．（cf. Peltonen et al. 2003 ; Geology, 31, 645-）

初日のセッション#13ではアルプスから東南アジアまでテーチス海域各地からオフィオライトの報告があったが，従来主な研究対象だったオマーン，キプロス，ギリシャ，そして地元のアペニンに加え，アルバニア（４件）とチベット（８件）の発表が目立った（写真１）．アルバニアには東西２つのジュラ紀オフィオライト帯があり，東側には無人岩を伴う島弧型オフィオライト，西側には海嶺型オフィオライトが分布し，海洋性島弧・縁海系での形成が議論されている．#105ではザネッティがODP 125 & 195航海で掘削された伊豆・マリアナ前弧の鳥島，コニカル，チャモロ海山のかんらん岩の岩石学的なまとめを行ったが，このテーマについて日本からの発表がなかったのは残念だった．#127では米国のクスキー（招待）が中朝地塊中央造山帯の北京北東，遵化付近の約25億年前（東亜最古）のDongwanziオフィオライトについて報告した（cf. GSA Today, 12（7），4-11. 2002）．これはかつて緑色岩帯とされていたが，枕状溶岩は縞状鉄鉱層に覆われ，岩脈群や斑れい岩，超苦鉄質火成沈積岩，ハルツバージャイトも揃い，クロム鉱石のCr#は0.74-0.93という．このオフィオライトの存否は始生代におけるプレートの存否に関連して争われている（Zhai et al. 2002 ; Science, 295, 923. http://www.sciencemag.org/cgi/content/full/295/5557/923a）．後期始生代～前期原生代のオフィオライトはバルト楯状地からもいくつか報告された（写真２）．#148では小川が嶺岡とアンカラのメランジを比較しながら前弧域におけるメランジの形成過程を論じた．小川はこのセッションの論文集（The Island Arc特集号）とディレックの日本招待を企画している．

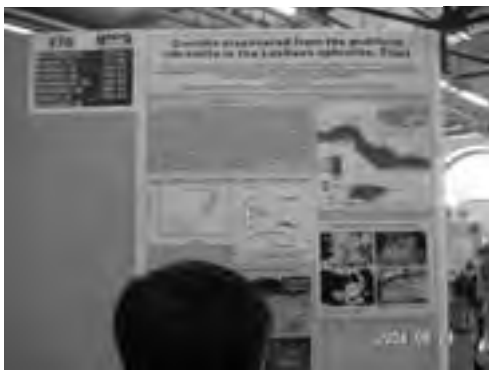


写真１．チベットのラサ南東200kmのルオブサ（Luobusa）オフィオライトのクロム鉄鉱からコース石包有物を発見したというYang　Jingsuiほかのポスター発表（超高圧岩変成岩セッション，24日，T36.01, #153-25, Booth 377）．このオフィオライトは以前からダイアモンドが産すると言われていた（Bai et al. 1993, Can. J. Earth Sci., 30, 1650-; Robinsonet al. 2000, 31st IGC abstract）．

初日はイタリア発の国際誌「オフィオリティ」の発行人ボルトロッティと最近オフィオライト関係の論文集（GSA Spec. Paper 349 & 373, Geol. Soc. London Spec. Publ. 218）を相次いで編集・刊行したディレックのセッションとあって，140席の会場がほとんど埋まったが，その後次第に空席が増え，４日目の聴衆が30人程度だったのは日本人研究者として残念である．

Report 2　ポスト巡検P54「Structure of the Italian dolomites, partially along the southern sector of the TRANSALP seismic profile」巡検参加報告

加藤直子（東京大学理学系研究科地球惑星科学専攻）

第32回万国地質学会・会議後の８月28日から31日まで，主として南部アルプス・ドロミテ地域を中心とした巡検に参加した．この巡検は，ドロミテ地域に分布する中古生界の層序と構造を主としているが，巡検ルートは1998から1999年にかけて実施されたTRANSALPと呼ばれるイタリア・オーストリア・ドイツの三カ国の共同で実施された大規模な深部地殻構造探査の測線に沿っており，とくに南部アルプス全般の地質構造についても巡検のテーマの一つとなっていた．

巡検のリーダーはヨーロッパ最古の大学であるボローニャ大学のAlberto Castellarin博士で，ほかの案内者はボローニャ大学の地質

学者と，TRANSALPの地球物理学関係の代表を務めたトリエステ大学のRinaldo Nicolich博士であった．巡検には日本からの参加者6名の他，カナダ・アメリカ・ブラジル・スイス・フランス・中国・クェートなどの各国からの参加者を含め，総勢20数名が参加した．

ドロミテ地域には，最高峰マルモラーダ（標高3343m）に代表される標高２千数百メートルの山々が連なり．それらの山腹にはペルム系から三畳系にいたる中古生層が大きく露出している．巡検の最初の３日間は，ペルム紀から三畳紀にかけて，引張性のテクトニックな場で堆積した石灰岩-苦灰岩を中心としたシークェンスを観察した．石灰岩-苦灰岩中の堆積性のフォアセット層理や，重力滑動によって生じたと解釈されているシート状岩体の累積状況，さらにはペルム系蒸発岩のダイアピール状の流動にともなって形成された褶曲構造などが観察できた．巡検ルートが2000mから2500mにいたる山岳地域で，大規模な山腹の露頭に基づいて，それぞれの岩体の関係はよく理解できたが，反面，シート状岩体の接合状態など，露頭に接して観察できる機会が少なかったことが多少残念であった．

アルプス山脈についての印象としては，圧倒的な短縮変形が卓越しているという印象が強かったが，ドロミテ地域に露出している岩石は，短縮変形は軽微で，堆積後，重力性の変形を除けば，そのままの形で隆起してきたという印象であった．三畳紀に噴出したピロープレッチャーも，日本のグリーンタフ地域よりも新鮮な状態で保存されていたことに驚いた．

最終日は，ドロミテ地域からベネチア平原にいたる地殻構造探査測線に沿って，地質構造の概要を観察した．ペルム系の基盤をなす千枚岩をはじめ，アルプス山脈南縁の衝上断層にいたるルートである．この衝上断層の上盤側には高角度をなすメッシニアンの礫岩層が分布し，圧力溶解によって形成されたくぼみが礫の表面に見られた．異なる２つのアルプスの構造モデルの相違点なども紹介され，地殻構造上の未解決な問題についても認識を深めることができた．

案内者の参加者に対するケアには行き届いたものがあり，野外巡検は終始なごやかな雰囲気で進められた．反射法地震探査による地質構造の研究を専門としている私にとっては，TRANSALPの地殻構造探査の詳細なスペック，観測中の苦労話や解釈上の問題を聴けたことも大きな収穫であった．

写真１：ニコロ峠からマルモラーダ山を眺望する参加者

Report 3　プレ巡検B02:The subducted Tethys in the Aosta Valley参加報告

植田勇人（COE研究員／北海道大学大学院理学研究科）

私は，32nd IGCに伴い，イタリアアルプスの巡検に参加した．日本では見られない，大陸地殻が沈み込んで形成された地質構造を見てみたいと思い申し込んだ．氷河を抱くアルプスの山懐に行ってみたかったことも，モチベーションのひとつだったことは否定できない．巡検は8/15-19の５日間で，案内者はSilvana Martin（伊Insubria大），Gaston Godard（仏Paris VII大），およびGisella Rebay（伊Pavia大）．参加者は27名で，日本人では，産総研から中島隆さんと竹内圭史さん，北大から山崎徹君と私の４名であった．15-16の２日間はおもにモンテローザ山の中腹，17-18はアオスタ渓谷の支谷を訪れた．巡検案内書はhttp://www.apat.gov.it/site/it-IT/APAT/FieldtripGuidebooks/からダウンロードできる．

8/15の昼過ぎにノヴァラという街に集合し，バスで出発した．車窓からは，氷期にアオスタ渓谷からポー平原に舌状に流れ出ていた氷河が残した，巨大なモレーンが見えた．スキーリフトの駅で3人の山岳ガイドと合流し，リフトで標高2900mの鞍部まで上がった．霧の中，ツェルマット－サーズオフィオライト（アフリカ大陸の下に沈み込んだテーチス海）とモンテローザユニット（テーチスを追って沈み込んだヨーロッパ大陸の一部）との褶曲した接触境界などを観察した．夜は尾根上にあるホテル風の山小屋に泊まった．夕食のパスタもワインも美味しかった．また，茹でとうきびを裏ごしした上に，四つ切りのカマンベールチーズを載せた料理も，シンプルではあるが，融けたチーズがどろっと流れ出ていて美味であった．

翌16日朝は快晴．モンテローザ山を途中まで登る班と，尾根筋を下る班に分かれ，私は前者に加わり歩き始めた．ツェルマット－サーズオフィオライトと珪長質なモンテローザユニットで岩肌の色が異なり，両者の低角なナップ境界を見渡せた．尾根道から斜面に入ると幅500mぐらいの緩傾斜の氷河にさしかかった．アイゼンを履き，10人ぐらいずつ数珠のようにザイルで繋がってなんなく横断できた．この日の目的地は標高3500mにあるモンテローザユニットのミグマタイトの露頭だった．大陸地殻内の高温変成で形成された菫青石が，衝突時の高圧変成で微細なざくろ石や藍晶石に置換された仮像を観察した．麓まで降りた後は，上盤であるアフリカ（アドリア）側の大陸地殻とされるセシア－ランゾ帯の変成岩を観察した．上盤プレートの一部が沈み込み帯深部に引きずり込まれたのであろうか，沈み込まれる側の岩石がエクロジャイト化している様は，奇異に思えた．

17日は，ツェルマット－サーズオフィオライト中の，エクロジャイト相の変成作用を受けた銅やマンガンの鉱床を見学した．Servette鉱山跡周辺では，溶鉱炉や鉱滓の遺跡と母岩の多様な変成岩を観察した．Praborna鉱山跡は紅れん石の模式地だそう

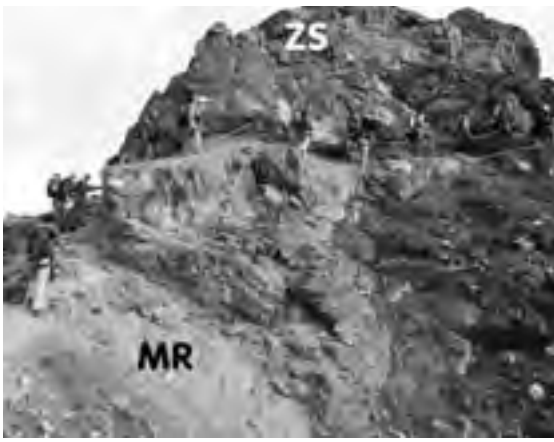


写真１（上）：２日目の朝，モンテローザ山を背景に記念撮影．写真２（下）：ヨーロッパ大陸からテーチス海へ：モンテローザユニット（MR）とツェルマット－サーズオフィオライト（ZS）の境界部を行く．

写真３：４日目のStop 1．山々を見渡しながら大構造の説明を聞く．中央で手を挙げているのが筆頭案内者のS. Martin．右側には脚半を巻いた竹内さんも見える．

で，violan（Mn単斜輝石）やalurgite（Mn白雲母）などの珍しい鉱物を見ることができた．かつてここで採掘されたマンガンを加えることが，透明なガラスを作るための”top secret”だったことを，G. Godardがユーモアを交えて説明してくれた．

18日はまず，尾根からパノラマの景色を眺めたが，見えるはずのマッターホルンは残念ながら雲の中だった．長い道を歩き，ブルーベリーの茂る丘に上ると，三方を崖に囲まれた美しい湖が現れた．皆が息をのみ，誰かが「これは典型的な氷跡湖だ」といい，ふむふむと感心しながら丘を下ると，右手にダムの提体が現れた．湖畔の小丘はコーズ石包有物が報告された泥質片麻岩であったが，ホストのざくろ石巨晶ほとんど採り尽くされてしまったらしい．ここで巨晶を見つけても皆さん採らないで，とG. Rebayが悲しそうに説明していた．湖岸では，泥質岩中のエクロジャイトのブーディンや，ペグマタイト様斑れい岩の単斜輝石を置換したオンファス輝石の巨晶などが見られた．その後，蛇紋岩やコロナ組織の発達するトロクトライトなどを観察しながらまた長い道を下った．

19日朝も山の眺望は諦め，13世紀の城の屋上からアオスタ渓谷を眺め，セシアーランゾ帯の崖から落ちた巨石を観察し，最後にローマ時代の道を訪れた．高圧変成岩の崖を切り割った道が保存されていたが，その延長が現在も街の通りとして使われていたのには感心した．ここで巡検は終了し，バスでフローレンスに向かった．

全体の印象として，まず毎日よく歩く巡検であった．最終日を除けば，朝バスを降りてから夕刻バスに拾われるまで移動はほとんど徒歩であった．また，眺望のよい場所が各日のStop 1に設定されていて，毎朝山を眺めて地質の全体像を抑えてから歩き始めるスケジュールが印象的であった．露出がよく岩相境界を一望できることもあろうが，常に大構造を頭に置きながら露頭を見ようという，案内者の意識の表れではないかと感じた．加えて，壮大なアルプスのテクトニクスが，複雑に分布するユニット間の構造的関係を丹念に追って行く地味な作業を礎にしているのだなと，山々を背に熱く語るS. Martinを見ながら感じた．

Report 4　ポスト巡検P40「Geoloogical tasting and wine mapping in central Italy」参加報告

新妻祥子（COE研究員／東北大学大学院理学研究科）

第32回万国地質学会の終了後，post-congress巡検に参加した．フィレンツェから一歩郊外へ出ると，生活の必要に応じて作られた石畳，石造りの建造物，ブドウ畑などが地形と地質に溶け込んでいるのが印象的だった（写真１）．また，イタリアの地形や地質分布，岩相は日本と非常に良く似ていて驚いた．

巡検では，イタリア半島中部のアペニン山脈をフィレンツェからアンコーナまで西から東へ横断した．アペニン山脈は，白亜紀から中新世までの堆積物のスラスト帯からなる．西から東に向かって，Internal Apennic Unit（写真２），Intermediate Apennic Unit（写真１），External Apennic Unitという順に断層によって変形しながら衝上した堆積物が造山帯を形成している．また，鮮新世以降の堆積物が，スラスト帯の凹部を覆う．アペニン山脈のスラスト帯は，海洋底の沈み込みに伴う付加というよりも，大陸周辺の堆積物が大陸衝突に伴って褶曲変形しているような様相で，圧縮場だけでなく引張場もある．日本列島でいうと，私のこれまで研究してきた北部フォッサ・マグナと類似しているようである．

フィレンツェの南南東約30 kmに位置するMontegrossi quarryでは，Internal Apennic Unitに相当する見事な褶曲（写真２）を観察した．層厚がほぼ一定の平行褶曲，且つ，西翼が逆転する転倒褶曲で，大規模に山を削った採石場の北端となっていた．Marlが挟在する割合が相対的に多い層準では，層間滑り，層内褶曲や小断層によって少しずつ辻褄を併せながら複雑に変形し，calcareniteの卓越する層準ではより単純な変形に変化してゆく様子が良く判る．また南端では，同じ地層が逆転せずに観察され，イタリアの造山運動の激しさと露頭の大きさに圧倒された．

一方，緩やかな斜面の丘（写真３）には，ブドウ畑とオリーブ畑が広がっているというのがイタリアの田舎の風景だ．何気なく広がるブドウ畑ではあるが，列の間隔は収穫機の大きさ（２m）に揃っている．また，列の向きを斜面の傾斜に直交させると土壌が流されてしまい，斜面の傾斜に平行にすると水が流れすぎてしまうという理由から，列は，斜面の傾斜に程よく斜交させてあるそうだ．そして，ブドウ畑の土壌は，ほとんどその畑の丘を作っている地質をそのまま反映していた．従って基盤の地層（漸新世の頁岩とcalcarenite）が角礫としてゴロゴロ入っている土壌にそのまま若いブドウが植えられているのにはびっくりした（写真３）．

伝統あるワイナリーには，土壌の種類，斜面の方向，位置，ブドウの種類，収穫時期，醸造方法，熟成方法など，自然の原理に任せたすべての要因がワインの味を左右するというのを大真面目に楽しんでいるイタリアの生活があった．IGCとしても，参加者全員にItalian Wines and Geologyという冊子を配り，Geology and Wineというトピックセッションを設け，ポスター会場ではワインを振る舞うという徹底ぶりだった．そして，このGeology tasting and wine mapping in central Italyと題した巡検である．（日本で応用するとすれば，地質と日本酒もしくは焼酎，となるのだろうか？）

巡検参加者は，地震学者，考古学者，鉱物学者，第四紀学者，地理学者，堆積学者など多岐に渡り，総勢40人余という盛況ぶりで，２台の小型バスに乗って移動した．食事や余暇の際には，地質をキーワードに分野を超えた会話が飛び交った．また，英語以外の言葉を母国語とする同伴者や現地の方々と過ごした日々は，学会中とはひと味違った．食事の際には，バスの運転手さんが，イタリア語が

写真１．ウンブリア州からマルケ州へ抜ける街道沿いにて，アペニン山脈に分布する白亜紀石灰岩層にのる城．

写真２（左）．Montegrossi quarry；白褐色のタービダイト石灰砂岩（calcarenite）と赤紫色の細粒石灰質堆積物（marl）からなる互層（Scisti Policromi Fm.; 後期白亜紀）の転倒褶曲．写真３（右）．Chiantiを醸造するためのSangiovese畑．右端がBrolio城．

全然わからない私達に，英語まじりの（？）イタリア語でイタリア料理やマナーなど一生懸命教えてくれた．宿へ向かうバスの中では，最後部座席に座っていたハンガリー地質調査所４人組の歌声（ハンガリー語）があった．そして終盤，巡検案内者のColacicchi博士（ペルージャ大学）から，Geologia e Vini 2004という特別ラベルの「Sagrantino（ウンブリア州のブドウ）passito（干しぶどうワイン）」が参加者全員にプレゼントされた．Colacicchi博士の心づくしの案内，３日間をともにした参加者のみなさんに感謝したい．

Report 5　プレ巡検B13「The Role of Olistostromes and Argille Scagliose in the Structural Evolution of the Northern Apennines」参加報告

山本由弦（静岡大学理学部）

第32回IGCが，2004年８月20-28日にイタリア・フィレンツェにて開催され，学会に先駆けた15-19日にかけて表記の巡検が行われた（巡検リーダー：Dr. G. A. Pini, University of Bologna, Italy）．本巡検は，IGCのセッションの１つである「Accretionary Wedges and Mélanges - Olistostromes and tectonosomes in mélanges of accretionary wedges」の巡検としての意義が大きく，参加者の多くが同セッションでも発表を行った．日本からも文末にあるように多くの研究者や学生が参加した．なお，巡検タイトルにあるArgille scaglioseは，Scaly clay（鱗片状劈開）の同義語である．

巡検は学会会場のあるフィレンツェと，そこから約80km北に位置するボローニャとの間に横たわる北アペニン山脈で行われた．北アペニン山脈は，北東フェルゲンツの衝上断層群とスラストシート，それにナッペで特徴付けられる．衝上断層に境された各ユニット（Ligurian Units）は，白亜紀後期～始新世前-中期にアドリアマイクロプレートの収束によって配列し，その上にLigurian Nappeが漸新世～第四紀にかけて衝上している．Ligurian Nappeが衝上する過程およびその後，Epiligurian sequenceがその上位に不整合で堆積している．北アペニン山脈は，Abbate et al.（1970）によって初めてオリストストロームが記載された地域であり，日本でも勘米良（1977）によって紹介され，広く知られるようになった．本巡検は，オリストストロームの典型的な産状を観察でき，かつこれらメランジュの欧州における研究の最前線を知る非常に貴重なものとなった．

本巡検の主な目的は，北アペニン山脈の大構造の理解と，オリストストローム起源およびテクトニック起源のメランジュを観察するものであった．４日間の巡検は，主に見晴らしの良いパノラマ地点での大構造およびメランジュの分布の説明と，実際にメランジュが露出する露頭での議論の２つで構成された．

パノラマ：北アペニン山脈は，自然豊かで植生も多いものの，急崖も多く好露頭が点在する．また標高が高い地域では，森林限界を超えるためにヨーロッパアルプスやロッキー山脈並の景観を臨むことができる．巡検では北アペニン山脈の断面を観察できるポイントで説明がなされ，示された断面図とあわせて大構造がよく理解された．北アペニン山脈に分布するメランジュは，非常にルーズな固結状態であり，特にテクトニックな変形を被ったものは鱗片状劈開を伴っているために，侵食されやすいようである．そのため，遠景でのメランジュは，植生のほとんど発達していない崩壊地か，すでに崩壊が完了した緩斜面であり，後者は農場として利用されていることがほとんどであった．そのため，メランジュの分布は極めて視覚的であった．

露頭にて：北アペニン山脈のメランジュは，いずれもBlock-in-Matrixの産状を示す，１）堆積直後のオリストストローム起源のものと，２）オリストストローム起源のメランジュがLigurian Nappeの衝上に伴って剪断を受けているもの（Tectonosomesと呼んでいた；Sheared olistostromeに対応）の２種類があることが説明された．オリストストロームは泥質基質中に異地性を含む様々な岩種・粒径のクラストを含み，それらのほとんどが角礫状であった．この角礫状クラストの成因について，オリストストロームは層流で移動するため，タービダイトや土石流と異なりクラストの円磨がほとんど進行しないと説明された．一方このオリストストロームがのちのテクトニックな要因で剪断されたものは，上記の産状に加え泥質基質に鱗片状劈開が著しく発達し，根無し褶曲や弱いS-C構造が認められた．上記のほかにBlock-in-Matrixの産状は示さないが，スランプ起源の擾乱した堆積物が見られた．こちらは比較的連続する砂岩層および泥岩層の著しい層内褶曲を示す．

オリストストロームの発生に伴って，その上部は擾乱されるようで，オリストストロームの上部が泥質スランプ堆積物やタービダイト砂岩に連続的に覆われている例もいくつか見学した．それらの露頭はたいていオリストストロームとスランプもしくはタービダイト砂岩が互層状になっていた．オリストストロームとタービダイト砂岩の互層では，のちの

写真１：パノラマ地点で北アペニン山脈の大構造について説明を受ける参加者．写真右側で左手をあげて説明しているのが，巡検リーダーG. A. Pini博士．

写真２：Tagliole valleyのオリストストローム露頭．スケールは名古屋大学丹羽正和氏．

写真３：写真２露頭基底部のオリストストローム露頭拡大写真．

ステージのテクトニックな剪断がオリストストロームの基質に集中していた．反対にオリストストロームとスランプ堆積物の互層では，剪断がスランプ堆積物部分に集中していた．おそらくオリストストロームの剪断強度が，スランプ堆積物よりもやや大きく，タービダイト砂岩よりは小さかったのだと考えられる．

巡検中すべての参加者が感じたことは，イタリアはさすがに食の国だということであろう．初日の昼食が例外的にランチボックスだったことを除けば，１日２回，昼と夜にたっぷり約２時間ずつイタリア料理のフルコースが供された．巡検の途中にもかかわらず，昼食でも必ずワインが振る舞われた．各地点で議論が白熱していたこともあり，昼食の開始時間が遅れることが多かった．そのためか，私は夕食時にあまり空腹でなかったことが残念である．ところで日本においてもワイン愛好家が増えつつあるが，巡検中日本人が間違えやすいマナーの数々を教えられた．中でも印象的だったのが，ワインはグラスが空になるまで絶対に注いではいけないということであった．ビールと同様に，ワインの酸化が進行し，味が変化するためであろう．とかく日本人の感覚では，グラスを常に満たしてしまいたくなるが，欧米では失礼にあたるそうである．

本巡検を通して，我々はすばらしい露頭と，この古典的な地域での最新の研究紹介，そしてイタリア料理とワインで心もおなかも大いに満たされた．この巡検の企画や手配をしていただき，そして声が枯れるまで説明していただいたG. A. Pini博士をはじめとする案内の方々，そして各地点でともに多くの議論をした参加者の方々に感謝したい．

参加者（敬称略，国別）R. Harris, G. Moore, J. Sears （USA）, J. L. Alonso, C. Pelaez, A. Garcia-Cortes, A. Suarez （Spain）, T. Bechstaedt （Germany）, J.B. Germs Gerard （South Africa）, D. Gray （Australia）, M. Wendorff （Botswana）, 今永勇，江藤哲人，小川勇二郎，加藤潔，狩野謙一，木村学，丹羽正和，久田健一郎，福井亜希子，山縣毅，山本由弦．

案内者：G. A. Pini, C. C. Lucent, C. M. De Libero, F. Dellisanti, A. Landuzzi, A. Negri, F. Tateo, L. Cantelli, F. Gamberi （Italy）, D. S. Cowan （USA）

番外編その１　P54ドロミテ巡検遅刻記

大友幸子（山形大学教育学部）

巡検の集合場所は，第32回万国地質学会の会場であるバッソ要塞前である．集合は９時．日程表によると，初日は10時５分の列車に乗ってイタリア北部の町ボルツアーノまで行き，そこから貸し切りバスで移動である．その朝私は，ホテルのバッゲージルームに大半の荷物をおいてバッソ要塞に向かった．何日も通い慣れたファエンツア通りを歩いて要塞の門につく．ちょうど９時５分前についたのだから，だいたいのメンバーは集まっているはず・・・であった．が・・・要塞の門の前の広場には誰もいない！！．かなりいやな予感がしたが，高鳴る鼓動を押さえて門のところにある守衛所で，「集合場所はここなのか？他の人たちはどこにいるの？」と巡検の日程表を見せて聞いてみる．守衛さんは「時間や場所はここだが・・」といいつつ，日程表をさして，「28日（昨日）だよ」と指摘した（なお，守衛さんはイタリア語．たぶんこんなやりとりだったはず）．わたしは凍り付いた．暑い時に流れる汗とは別種の汗が体全体から吹き出したような一瞬呆然自失．そして心臓がどきどきした状態だったが，急いでさっきチェックアウトしたばかりのホテルに引き返した．ホテルからＩＧＣ巡検全体のSecretariatに電話して事情を話し，昨日メンバーが乗ったのと同じ時間の列車にのってボルツアーノに向かいたいと申し出た．Secretariatからは「巡検案内者にすぐ連絡する．フィレンツエ駅に着いたら次の指示を出すから電話するように」ということになった．

写真：矢印はオーラからドロミテの谷に入っていく道路．

なんとか10時５分のミュンヘン行きの列車に乗った．Secretariatからの指示は「ボルツアーノについたら路線バスで自力で今晩の宿泊地に行け」というものだった．列車の中で先日買ったイタリアの地図をみて今日の宿泊ホテルのあるPera di Fassaをさがす．日本地図で○○村を探すようなもので，見あたらない．同じコンパートメントにのっていたイタリア人に聞いてみたが「知らない」という反応．ボルツアーノからはたして路線バスがあるのかどうか不安に駆られながら，14時30分に到着した．イタリア北部ではオーストリアに近いため色々な標示がイタリア語ドイツ語併記のものが多い．そのせいか駅前でバスターミナルの場所を聞くのに，英語が通じない．何人にも聞いてやっと駅から100mほどのバスターミナルに到着した．さて次に私が行こうとするPera di Fassaには何時のどのバスで行けばいいのか？なんとこの日は日曜日で，切符売り場の窓口が全て閉まっていた．ターミナルを掃除していたおじさんに聞こうとすると，「ことばが分からないからあそこ

にいるシスターに聞け」という仕草．さすがにそのシスターはターミナルの中にいる人の中から英語をなはなせる夫婦を捜し出してくれ，時刻表で路線バスを探してくれることになった．しかし運悪く日曜日，10本中７本は運休という状態である．まずPera di Fassaにいくバスは今日１本あったがもうでてしまったということが判明．私は「最寄りの町まで行ければよいので別のルートのバスはないか？」とお願いすると，なんとか19時20分発の最終バスが（この日は13時代のバスの次がこれ）あることがわかった．その夫婦は日程表に書いてあるホテルに電話して，終点のバスターミナルに迎えに来てもらえるようたのんでくれた．

その後，私は途中の中継地のオーラの町まで行けば，ドロミテの谷に入っていく路線バスがもっとあるかも・・と思いオーラに列車で移動したが，結局ボルツアーノからくるバスしかないということを知っただけであった．バスを待っていると車の兄ちゃんが止まって「Pera di Fassaまで連れて行ってやるよ」と声をかけられたりしたが，どうも信用していいのかどうか確信がなかったので，しつこい誘いを断ったりといったことはあったが（もし本当に親切な兄ちゃんだったら，疑ってごめん），のどかなオーラの町はずれにある駅で時の流れるままに過ごした．そして夕闇がせまるころ待ちかねたバスがやってきた．21時過ぎに終点のバスターミナルに着くと，ホテルのスタッフではなく巡検案内メンバーが“IGC P54”というボードを持って迎えてくれていた．

何でこんな事態になったかというと，“巡検はIGCの終わった次の日に出発”という私の思いこみによるものである．７月末に巡検について送られてきたメールには，“あなたの旅行プラン・ホテル予約をチェックしなさい．連絡いただければホテルの手配しますよ”というもので，出発日が早くなったということは，実はその日程表の添付ファイルを開かないと気づかなかったのである（たぶん思いこみで気づかなかったでしょう）．この添付ファイルにあった日程表を，IGC期間中に巡検デスクに行ってもらって見てさえ，思いこみのために日程変更があったことに全く気づいていなかった．

こんなハプニングがありながら，なんとか３泊４日の巡検に後半だけでも参加できて良かったというのが正直な思いである．ご迷惑をおかけした巡検案内者の方々，道中何人ものイタリアの方々にお世話になったことを深く感謝する次第である．

番外編その２　イタリア ―夫はカモに？ 私はオルガン・コンサートに浸って―

赤羽京子

４年前のブラジルの時にも，夫（久忠・富山市科学文化センター）は「発表するから」と言って大金をはたいて地球の裏側まで，私にも子供達にも「一緒に行くかい？」の一言もなく，一人で行ってしまいました．

今年は「今度はイタリアへ行ってくる．来年３月で60歳定年だから，これが最後の国際学会参加になるかも知れない」と自分ではさっさと計画を立てながら，今回も「一緒に行くかい？」の一言はありませんでした．私としては，「これを逃したら私ももう行けないかも知れない」と思い，私の友人も誘って強引に一緒にイタリアへ行く計画を立てました．この策略が見事に功を奏し，夫は一生懸命インターネットで安い航空券と安い宿を探し，場合によっては余り得意でもない英語で電子メール・ファックス・時には直接電話で交渉して，随分安い料金でイタリア旅行ができました．フィレンツェを含め，ローマ・ヴェネツィア・ミラノと私と友人は観光を満喫してきました．

＜ローマでカモに？＞

名誉会員の藤井昭二先生に「イタリアでは日本人がカモにされますから気をつけて」と言われていましたのに，夫は同じ母娘と思われる３人グループに二度にわたってカモにされそうになりました．

飛行機が到着したローマでの朝，地下鉄の入り口で少し遅れて歩いていた夫の変な話し声が聞こえて振り返ると，10歳前後と思われる女の子が夫に妙に近づいて物乞いをしているようでした．夫は「No!　No!」とさかんに言っています．よく見ると女の子は夫のウェストバックに手をかけているではありませんか！！夫のちょっとやそっとの拒否の声では物怖じしない様子に私は駆け寄って思わず少女の手をつかみ「Ｎｏ！！」と大声．それを見て近くにいた青年がその女の子を大声で叱り付けてくれて，何とかその場は難を逃れました．

ところがその日の夕方，同じ地下鉄の入り口で，朝と同じ女の子を含む母・娘三人組にまたターゲットにされたのです．やはり私達から少し遅れて歩いていた夫，今度は結婚して四半世紀，聞いたことのないような大きな「NO!!」の怒鳴り声．振り返ると，近くの通行人みんなが夫を振り返って見ていました．三人の母・娘があわてて夫から離れるところでした．よほど人の良いカモに見られたのでしょうね．私がいなかったらどういうことになっていたことやら，本当に困ったものです．

＜オルガン・コンサートに感動！＞

IGC主催のオルガン・コンサート（フリー・プログラム）は人気が高く，早々と参加申し込みは締め切りになってしまい，学会参加者でない私達はもちろん申し込みに間に合わなかった夫も聞けないはずでした．それでも何とか聞けないものかと，三人で会場へ押し掛け，交渉しましたが断られてしまいました．ところが，そこに救世主登場！！某大学の某氏が自分は予約券を見せ，私たちには彼のネームカードや学会参加者に配られた赤いリュックを貸してくれ，「予約券を忘れたとかなんとか言って入ってしまいましょう」と半ば強引に関所を通過．

すばらしいパイプオルガンの重厚な響き・ステンドグラスや壁画の模様などルネッサンス時代の余韻に浸った感動の一時でした．（夫はそれほど感動していなかった様です．何だか夫の感性に疑問を感じてしまいました）．

おかげ様で，期待していたオルガン・コンサートを聴くことができました．本当にありがとうございました．

IGC関連の原稿はこのほかにも寄せられています．次号掲載予定です．

フィレンツェのサンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂．ここでIGCのオルガンコンサートが行われました．（写真提供　石渡　明氏）

topics

「第三紀」の消滅に続き，「第四紀」も！
—地質年代区分からこれらが消えた？—

今年８月にイタリアで行われた第32回万国地質学会で，参加者全員に，今年６月号のEpisodes（vol. 27, no. 2）の別刷が配付された．新しい地質年代区分の論文である（Gradstein et al., 2004）．この新しい年代区分では，第四紀（Quaternary）が無くなり，新生代は，NeogeneとPaleogeneの２つのPeriod（紀）に分けられている．学生時代に習った新生代を２分する第三紀（Tertiary）と第四紀の区分が両方とも無くなっている．実は第三紀という用語は，国際地質科学連合（IUGS）の国際層序委員会（International Commission on Stratigraphy: ICS）では，15年前から正式区分からは外されており（Cowie and Bassett, 1989: Ogg, 1996），使用可能な非公式の用語となっている．つまり，今回の改定前の状態で，新生代は，３つの紀から構成されていた（Paleogene, Neogene, Quaternary）．そして今回の改定によって，第四紀を構成するPleistocene（更新世）とHolocene（完新世）は，Neogeneに含まれ，新生代は，PaleogeneとNeogeneの２つの紀に分けられた．Quaternaryは，正式年代区分ではなく，鮮新世の最後のstage（階）である2.59Ma以降のGelasian（Ogg, 1996）と，更新世と完新世を合わせた亜紀となっている．15年前の第三紀と同じく，使用可能な非公式の用語の扱いである．

今回の改訂によって，Neogeneが従来の第四紀を含み，第三紀という用語が正式名称としては存在しないのなら，新第三紀はその訳語として適切でない．Paleogeneの古第三紀も同様である．IUGSの事務局作業の一部をもつ中国では（機関誌のEpisodesを出版），すでに新第三紀と古第三紀に替えて，新近紀（Neogene）と古近紀（Paleogene）の訳語を用いているようである．

今回のこの改定は，ICSでは承認を受けているようだが，Episodesの同じ号に，今回の改定の理由（Ogg, 2004）と国際第四紀学連合（INQUA）の層序年代委員会の委員長の提案（Pillans, 2004）が掲載されている．両者をみる限りでは，ICSもINQUAも，納得して提案しているように感じるが，INQUAからは，今回の改訂に対して執行委員会名の反対意見が出されており（第四紀通信, vol. 11, No. 4），このまま収まるのかどうか，疑問である．米国地質学会が出している年代区分では，Tertiaryは現在も使われており（GSA Geologic time scale 1999: GSAのホームページより），また地質学会（ロンドン）でも教材用の資料をインターネットで見ると，Tertiaryはここでも使用されている．長年使われて，馴染みのある，TertiaryやQuaternaryがICSの提案で，急に無くなるとも思えない．日本国内におけるこれらの改訂には，各分野や階層での混乱を避けるため，国内でどのように使用するかの議論を行い，統一した使用の基準をもつことが望ましい．教科書を含めての改訂となると容易ではない．近年のこのような年代区分改訂の動きに対して，どのように対処するか，日本国内での地質年代区分をどうするか，国内外の様子を見つつ，国内でも関係機関や組織（日本学術会議地質学研究連絡委員会，日本地質学会，日本第四紀学会，産業技術総合研究所など）を中心に議論する必要があろう．INQUAが正式に反対していること，次回の改訂が2008年となっていることから，海外の反応や情報を入手しつつ，対応を検討しておくことが必要である．また同時に，ICSと国内の意見が違う場合は，それらをICSへ提出することも重要であろう．

Cowie, J.W. and Bassett, M.G., 1989, IUGS 1989 Global Stratigraphic Chart: Episodes, 12（2）, suppl.

Gradstein, F.M., Ogg, J.G., Smith, A.G., Bleeker, W., and Jourens, L.J., 2004, A new geological time scale with special reference to Precambrian and Neogene. Episodes, 27, 83-100.

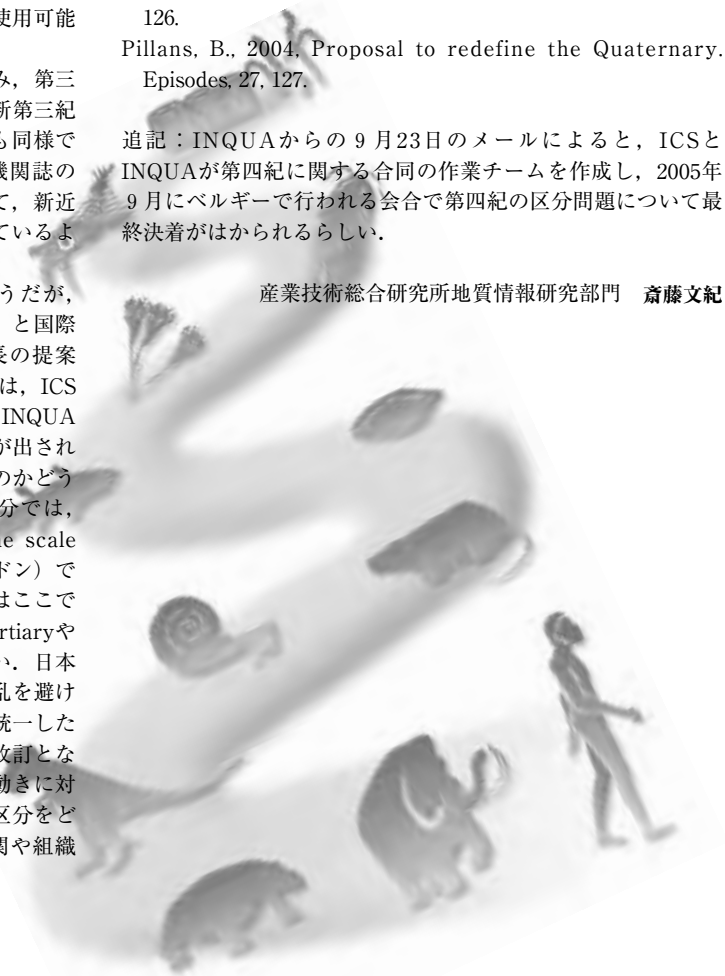
Ogg, J., 1996, A Phanerozoic time scale. Episodes, 19（1 & 2）, 3-5 & suppl.

Ogg, J., 2004, Introduction to concepts and proposed standarization of the term “Quaternary”. Episodes, 27, 125-126.

Pillans, B., 2004, Proposal to redefine the Quaternary. Episodes, 27, 127.

追記：INQUAからの９月23日のメールによると，ICSとINQUAが第四紀に関する合同の作業チームを作成し，2005年９月にベルギーで行われる会合で第四紀の区分問題について最終決着がはかられるらしい．

産業技術総合研究所地質情報研究部門　**斎藤文紀**



XI International Palynological Congress（XI IPC）参加報告

新潟大学大学院自然科学研究科
博士前期課程１年　梅津慶太

2004年７月４日～９日，スペイン南部のグラナダ市にあるConference and Exhibition CentreでXI International Palynological Congress（XI IPC：第11回国際パリノロジー会議）が開催された．私は９日（金）のアルハンブラ宮殿ツアーを除く全日程に参加した．日程は７月４日（日）の14：00から受付が始まり，口頭発表の各セッションが，４つの会場で５日（月）から８日（木）の８：30から21：00まで，昼食と数回の休憩を挟んで行われた．設けられたセッションはa. Pollen biology, b. Pollen and spore morphology, c. Aerobiology, d. Pollen and allergy, e. Entomopalynology and melissopalynology, f. Forensic palynology, g. Palaeopalynology and evolution, h. Quaternary palynology, i. World pollen databases で，現生および化石のパリノモルフ（花粉･胞子･渦鞭毛藻など）を扱う研究者が盛大に集まった．初日，４日の21：30からはCocktail Reception がConference and Exhibition Centreの屋上で行われた．また，Social eventとして６日（火）と８日（木）の夜にはバスで郊外のレストランへ移動し，Andalucian DinnerおよびGala Dinnerがもうけられた．これらはいずれも日の暮れる21：00過ぎから始まり，夜半過ぎに至るものであった．

私の専門である白亜紀花粉･胞子化石を含む口頭発表のセッションはg. Palaeopalynology and evolutionの中のg6. Mesozoic palynologyで，７日（水）の８：45から19：30にかけて開かれた．この日は一日中，中生代パリノロジーの研究発表を立て続けに聞くことができた．これは日本国内の学会では経験することのできないことである．特に白亜紀の花粉･胞子化石の発表では，やはり被子植物花粉に関する発表が多く，被子植物花粉の出現や進化への関心が世界的に高いことが再確認できた．

一方，ポスター会場ではいくつもの中生代パリノロジーのポスターが掲示され，日本では見たことのないこの光景に感動をおぼえた．私は，“New records of Early Cretaceous terrestrial palynomorphs from Japan”というタイトルでポスター発表を行った．ポスターは初日の４日から最終日の８日まで掲示することができたが，ポスターを前にしたコアタイムは無かった．また，セッションごとにオーガナイザーから選ばれたポスター発表については，口頭発表の会場で５分間のbrief oral presentationができることになっていた．セッションg6では希望者全員がbrief oral presentationを行うことができた．私もbrief oral presentationを行ったが，セッションg6ではbrief oral presentationを行ったポスター発表者は意外に少なく，半分以下の人数（10人程度）であった．このため，時間的に余裕があり，質問タイムも設けられた．私もひとつだけ質問をもらい，何とか答えることができた．コアタイムが無く，ポスター会場には普段もあまり人がいなかったため，私の場合，ポスターを目の前にしてのディスカッションは，同じセッションで白亜系を対象としたポスター発表を行っている数人の研究者と何度か繰り返して行うこととなった．ディスカッションは化石の抽出方法や同定，年代，国際対比，パリノフローラなどに関して幅広く行うことができた．日本においては白亜系を対象とするパリノロジストは極めて少なく，今回ディスカッションをした研究者の国（スペイン，マレーシア，モンゴル）でも研究例や研究者が少ないという状況は同じだと話していた．

英語でのコミュニケーションに関しては，自分の思っていることを伝えるのに苦労した場面もあったが，多くの，そして深いディスカッションを交わすことができた．

私にとってこのIPCははじめての国際会議であり，英語でのコミュニケーションに不安はあったものの，brief oral presentationを除いては思いのほか緊張感は少なく，リラックスして参加することができた．今回のIPCに参加して，すべてを理解できたとは思わな

白亜紀花粉･胞子化石のポスター発表者と．ポスター会場にて．

Andalucian Dinner（６日）でのフラメンコ．

Closing Ceremonyの様子．次回のIPCは2008年Bonn（ドイツ）．

いが，口頭発表を聞いたり，ポスターの前でディスカッションすることによって，文献のレビューのみでは知り得ない，世界の中生代パリノロジーの現状を認識することができたことは大きな収穫であった．また，英語でしか自分の意思を伝えることができない場において，英語でコミュニケーションをするという経験を得られたことも大きな収穫のひとつであった．

今回のIPCを通じて海外のパリノロジストと知り合い，パリノロジーに関して幅広くディスカッションできたことは今後の研究に向けての良い刺激になった．

XI IPCウェブサイト　http://www.11ipc.org/index.htm

常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の４名でおこなっています．原稿はe-mailでいただければ幸いです．

t02h106@amail.shinshu-u.ac.jp　北沢俊幸（信州大）
akinori@eps.s.u-tokyo.ac.jp　髙橋昭紀（東京大）
microbe@hiroshima-u.ac.jp　白石史人（広島大）
f04j003d@mail.cc.niigata-u.ac.jo　梅津慶太（新潟大）

院生（研究生）の方へ「院生割引申請」について

平成17年度（2005年）院生割引会費の受付開始

2001年より会費の院生割引制度が設けられています．定収のない院生（研究生）については，本人の申請により院生割引会費が適用されます．つきましては，次年度（平成17年度）の会費について申請受付を開始致しますので，該当される会員は下記の書式にて申請書を提出して下さい（郵送）．**会費請求書発行の都合もありますので，受付〆切は11月24日（水）と致します．〆切までに申請のない場合は，通常の正会員価格の請求となりますのでご注意下さい．なお，これまで（～2004年度）の会費についての申請受付は終了していますので，2005年度分からの申請のみ適用となります．**

注意！！　毎年更新となりますので，今年度の割引を受けている方で，次年度も該当する方は改めて申請して下さい（来年３月まで院生（研究生）の方も申請すれば適用）．

送付先：〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6階　日本地質学会

2005年度日本地質学会会費院生割引申請書

（新規・継続）

日本地質学会　御中

私は，運営細則第12条第1項（1）に基づき，会費の院生割引を申請いたします．

年　　月　　日現在

会員番号：

会員氏名：

所属：　　大学　　研究科

専攻　　前期・後期　　年在学中

上記，本学の学生につき，定収のない院生（研究生）であることを証明いたします．

指導教官（等）

所属：

氏名：　　印

学　会　記　事

2004年度　第16回理事会議事録

期　日：2004年９月７日（火）
　　13：00～17：30
場　所：地質学会事務所
出席者：渡部常務理事，玉生副常務理事・運営財政部会-上砂，学研-徐・脇田，編出-狩野，普教-公文・吉田，橋辺（事務局）
　オブザーバー：斎藤靖二次期会長
欠席者：平会長，木村副会長，加藤副会長，天野・宮下・大友・伊藤・会田・中井

報　告

１．運営財政部会（部会長-天野　副部会長-大友，上砂）

総務委員会（委員長-天野）

庶務関係（担当-天野）

・科学技術館館長に有馬朗人氏が就任→挨拶状
・第19回「大学と科学」公開シンポジウム『ここまで進んだ都市防災』（2004年11月２日）後援依頼を了承→News９月号に掲載
・応用地質学会「最新のリモートセンシング技術を応用した防災地質」（10月18日）の協賛依頼を了承→News誌９月号掲載
・日本学術会議からHPのリンクについて依頼があった．そのほか，会長コメント（4/14,5/21,7/15,8/3）が送付された．
・日本地理学会は「ハザードマップを活用した地震被害軽減の推進に関する提言」（2004年８月，地理学会災害対応委員会）をまとめ，配布した．
・文部省科学調整費事業：サイエンスメディエーター制度の調査アンケート（NPOけいはんな文化学術協会）→天野理事回答記入,回覧確認のうえ返信
・科学教育研究協議会第51回全国研究大会（後援）終了報告
・海洋調査技術協会「第16回研究成果発表会」（11月18-19日）協賛依頼を了承

会員関係（担当-上砂）

１）入退会の承認
入会
正会員［１］：笠原敬司
正（院生割引）［４］：今山武志，西田尚央，藤本俊二，武川貴嘉
準会員［２］：倉本麻由，中本裕介
退会（正３名）：武田昌尚，武藤俊充，橋本勘
逝去（正１名）：大島　浩
２）８月末現在会員数　賛助38,名誉72，正4708（内，院割257），学生43，合計4861名
３）50年顕彰会員の追加について
　次の７名の方々がリストアップされていないことが判明したので，今総会における顕彰者に追加することとしたい．合計23名の顕彰者となる．
　石井良治・宇留野勝敏・岡田博有・武井晃朔・竹内貞子・邑本順亮・籾倉克幹
４）名簿掲載アンケートは現在約200名分集まっている．掲載了承確認のチェック（□欄に○印）をしている方が少なく，付け忘れの可能性がある．

関連学会連合（担当-天野）

・地質科学関連学協会連合
・自然史学会連合
・地理関連学会連合
上記３委員会は特に報告なし．

会計関係（担当-大友・上砂）

・７月までの月例会計報告
・2004年度決算見込み案および2005年度暫定予算案
　総会ではグラフなどにして説明し，詳しい表はnews誌に掲載することとする．
　千葉大会費用の収支については，緊急展示の設置などで会場設備費などが支出増加の見込み，
　また，参加登録費の収入見込みは，逆に１割減として決算予想をたてた．結果として年会費用の収支がマイナス超過になった場合には予備費などで補填することを考える．
・地質学雑誌の印刷所（現在日本印刷）の契約更新については，現在４社から見積を取って検討中.契約期間は２年である．
・平成16年度科研費研究成果公開発表B（100万円）の入金が8/20にあった
・顕彰者用バッジの在庫が不足したため，100個作成した（78,750円）
・鉱物鑑定干渉色表（ロゴ入り下敷き）2000枚の注文が明治テクノ㈱よりあり，2500枚の増刷りを行うこととした．ロゴは１枚10円を検討している．
・フィールドノートは防湿タイプで製作中である．税抜き原価は約400円程度になりそうである．

広報委員会（担当-大友）

ニュース誌編集小委員会（担当-大友）
・ニュース誌編集状況
　８月号（校了・発送済み）：巻頭　日本地質学会第111年　総会・年会プログラム/日本地質学会第111年総会議案/特集　平成16年７月新潟豪雨災害の速報（高濱信行・卜部厚志・新潟大学調査団）・平成16年７月福井豪雨災害の概要（服部　勇・山本博文）/案内　３件/各賞・研究助成　猿橋賞・笹川科学研究助成/公募　富山大学/報告　日本学術会議第19期第３回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会議事録（案）/紹介４件/学協会・研究会報告　ERAS集会（台湾）報告（磯崎行雄）/アジア・大洋州地球科学会（AOGS）第１回年会報告（吉田武義）/来年度のAOGSにセッションを申し込みましょう！/会員の声　全国の一般会員のみなさん，学会法人化基金募金に参加し，学会の将来の発展に寄与しましょう！（徳橋秀一）/JABEE最近の動向/The Island Arc日本語要旨　Vol.13 Issue 3/顧問弁護士　高木宏行氏のご紹介/支部コーナー　2004年中部支部総会・シンポジウム・地質巡検/院生コーナー　研究室紹介/追悼　遠藤　尚氏（古川和代）/2004年度第４回定例評議員会議事抄録・2004年度　第9-13回理事会　議事録/名簿掲載アンケート：会員名簿訂正・変更カード
　９月号：2005年度役員紹介ほか，浅間山噴火記事（表紙，記事中）

インターネット運営小委員会（委員長　渡部直喜，担当-大友）とくになし

２．学術研究部会（部会長-徐　副部会長-伊藤，脇田）

行事委員会（徐委員長）
・行事千葉大会全般（９月12日～23日まで，普及，関連行事も含めて）に対し，責任賠償保険の加入手続きを準備中．
・千葉大会緊急展示コーナーについて．９月13日までに申し込みがあったものは，講演要旨を作成してはさむことにする．
・講演要旨集は1300部作成する．今回はPDF形式としたために一部フォントの不具合や図表のずれなどが発生したものもあった.来年度以降の形式については，検討の必要がある．
・2005年年会日程について
　平島支部長・増田新理事を中心に来年９月の大会の準備はそろそろ始める必要がある.現在は現地に一任している状況である．増田さんが京大生協とともに千葉大会に参加する予定となっている．
・千葉大会で予定されているIYPEランチョンとGeoPark夜間集会とは，相互に関連深いので，調整する必要がある．
・９月20日昼に予定しているAOGSの進め方について検討した．その結果，斎藤新会長に趣旨を含めて挨拶をしてもらうとともに，木村副会長に学会再編の報告もあわせてしてもらう事とした．従って，演者は斎藤，佐竹，木村，脇田の各氏，および若干名とし，司会は吉田武義理事が行うこととした．この集会への参加を評議員に呼びかけることとする．

専門部会連絡委員会
国際交流委員会（委員長-脇田）
・32nd IGC（フィレンツェ）の参加報告がなされた．
環境地質研究委員会（研究委員会長-羽田忍）
・環境地質研究委員会の環境地質学会賞の

取扱について議論した．理事会からの申し入れに対して，環境地質委員会からはまだ返事が来ていない．

あらかじめ検討をすすめるために，次回の評議員会にて宮下理事から話題提供してもらってはどうかという意見があった．

ヒマラヤ地質研究委員会（委員長-在田一則）

地質学と地震研究委員会（委員長-嶋本利彦）

南極地質研究委員会（委員長-廣井美邦）

地質環境の長期安定性に関する委員会（委員長-高橋正樹）

上記４委員会とくになし

３．編集出版部会（部会長-狩野　副部会長-宮下，会田）

地質学雑誌編集委員会（委員長-狩野　副委員長-宮下）

・今月の編集状況は以下の通りです．（８月30日現在）

110-8：発行済み

110-9：校正中（論説５　ノート１　討論２　口絵１）

本年度投稿論文数69編［論説57編（和文53・欧文１），総説１，短報８（和文７欧文１），ノート３，討論２］口絵９和文４　欧文５）

投稿数昨年比　+11

査読中　51編

・10月号は飛騨外縁帯の特集号となる．表紙は通常号とは変える．

・J-STAGE登載準備について

JST委託業者により，公開画面のヘッダー作成等登載準備作業中．あわせて代行登載のための地質雑110巻1-7号（冊子・PDF）を業者に送付した．８月号以降も随時送付予定．

The Island arc 編集委員会（事務局　渡部）

・本雑誌に投稿掲載された論文と同じ内容のものが他の国際誌に掲載されている．初出に関係なく，サーキュレーションの良い方の論文が引用されることが危惧されるなどの報告があった．編集委員会として，著者に対して何らかの警告を出すなどの対応を検討することとなった．

企画出版委員会（担当理事　吉田）

・論集59号最終計画案および見積もりについて

700部の印刷で２社から見積を取った．印刷所はイセブと決め，価格については，3600円から4000円くらいの間で，編集委員会と売りさばきなどについて確認，相談のうえ決定することとした．計画案に対しては最終承認とする．

The Island arc連絡調整委員会（担当理事会田）

・平成17年度科研費の公募要領が通知された：受付け11月15日～18日．

基本的には昨年並みで申請する．

地質学用語集出版委員会報告（坂　幸恭委員長，新妻信明）

・８月16日，共立出版と出版契約を結んだ．発行部数1200部．

・９月14日刷り上り，千葉での販売を行う予定．１部4,200円．

・最終報告と９月17日付けにて委員会解散の承認について

委員会の解散を承認した．

４．普及教育事業部会（部会長-公文　副部会長-中井睦美，吉田武義）

地学教育委員会（委員長-阿部）

生涯教育委員会（委員長-柴）

地質基準委員会（委員長-新妻）

地層名委員会（委員長-天野）

上記４委員会とくになし

５．その他―１

支部長連絡会議（担当理事　玉生）

・支部規約（モデル案）最終確認

前回理事会の修正をうけた支部規約モデル案は了解され，各支部へ連絡することとした．（9/8　各支部に送付）

地質災害委員会（担当理事　玉生）

・福井県豪雨災害調査報告，HPへの掲載と同時にNews誌８月号に掲載した．

ニュース誌，HPへの情報や学術大会におけるポスター展示など，会員の機敏な対応ができている．

JABEE委員会（委員長-天野）

技術者継続教育委員会（PDE）（委員長-公文）上記２委員会とくになし

【以下，評議員会の下の委員会】

各賞選考委員会（委員長-新井田清信）

名誉会員推薦委員会（委員長-加藤副会長）

科研費委員会（委員長-竹内　章）

学術会議連絡委員会（委員長-井内）

女性地球科学者の未来を考える委員会（委員長-田崎）

研究企画委員会（委員長-　）

上記６委員会とくになし

法人化準備委員会（委員長-木村　学，幹事委員　立石，担当理事：渡部・玉生）

・法人化関係書類の取りまとめ

・募金状況（７/２６現在）募金総額12,277,850円

・千葉総大会会場での募金対策について

加藤副会長に募金体制を検討してもらうよう連絡することとした．

・学会法人化資料リストの整理

・総会前に文科省を訪問することについて，斎藤次期会長に文科内のつてを確認してもらうこととした．

・千葉大会総会での会員への説明内容

法務委員会（委員長　上砂）

・千葉大会での緊急展示に関する発表内容の校閲の仕方について検討した．

緊急展示要旨は通常のポスターセッションと同様の形式で提出してもらう．同時に著作権譲渡同意書の提出も求める．13日までに届いた要旨の校閲については行事委員会が一般発表と同様に行う．それ以後のものはその都度行事委員会が対応する．

倫理規定策定委員会（委員長-松本　良，担当理事　伊藤）

オンライン化委員会（委員長　鈴木）

地質学雑誌のありかた検討委員会（加藤委員長）

選挙管理委員会（委員長　手塚裕樹天野）

上記４委員会とくになし

○議　題

１．50年顕彰会員７名の追加承認

石井良治・宇留野勝敏・岡田博有・武井晃朔・竹内貞子・邑本順亮・籾倉克幹

以上７名の方を追加承認した．

２．監事，選任の件（総会での議決事項）

04年９月18日から2007年総会までの外部監事として，山本正司氏（司法書士）を選任し，総会に諮ることとした．

３．総会関係

１）総会議長，副議長の件

議長：増田俊明会員（静岡大）

副議長：伊藤　慎会員（千葉大学）

書記：２名　岡田　誠（茨城大学），阿部なつえ（JAMSTEC）

２）総会資料について

・総会審議事項：倫理綱領を盛り込んだ会則の改正

審議事項，５．その他で審議する．

・2004年度決算見込み案および2005年度暫定事業計画と予算案について

案については承認，2005年度暫定については，事業年度の変更が認められた場合に行うこととなる．

３）総会議事進行について

・総会議事進行表の確認

・事前打ち合わせ：9月18日11時から12時

2004年度第５回定例評議員会議事録

2004年９月30日

日本地質学会　評議員会議長

井内美郎

日時：2004年９月17日（金）13：00―17：35

場所：千葉大学総合校舎　C号館　1F　11（千葉市稲毛区弥生町33　JR西千葉駅，京成千葉線みどり台駅下車）

出席者：平　朝彦会長　加藤碩一副会長　木村　学副会長

（評議員20名）阿部国広　赤羽久忠　荒戸裕之　石渡　明　井内美郎　木村純一　片山郁夫　黒田潤一郎　榊原正幸　佐々木和彦　柴　正博　鈴木徳行　田崎和江　竹内　章　竹内　誠　仲谷英夫　新井田清信　新妻信明　蒡本　格　松本俊幸

（理事15名）渡部芳夫常務理事　玉生志郎副常務理事　天野一男　徐　垣　上砂正一　大友幸子　狩野謙一　会田信行　公文富士夫　中井睦美　宮下純夫　脇田浩二，（事務局）橋辺菊恵

欠席　評議員（委任状11名）：足立勝治　井龍康文　今岡照喜　紺谷吉弘　斉藤尚人　佐瀬和義　楡井　久　廣井美邦　矢野孝雄　吉川周作　吉田史郎（委任状なし３名）柴崎直明　平野弘道　松田博貴
欠席　理事（４名）：伊藤谷生　吉田武義

*出席20名，委任状11名で成立条件を充足し，書記に佐々木和彦・鈴木徳行両評議員を選出し議事に入った．

報告事項

Ⅰ　理事会報告

１　運営財政部会

１）総務委員会

庶務関係（担当理事　天野）

・21世紀の地学教育を考える大阪フォーラム，こどものためのジオ・カーニバル企画委員会より「第４回こどものためのジオ・カーニバル」後援の依頼があり，例年通り承諾した．
・朝日新聞社より，第２回ジャパン・サイエンス＆エンジニアリングチャレンジ（JSCE2004）－高校生科学技術チャレンジ－（ISEF提携コンテスト）について後援依頼があり，承諾した．応募期間8/30-9/17，一次審査会10/2，二次審査会11/6，11/7対象　全国の高校生，高等専門学校生（３年生まで）
・第19回「大学と科学」公開シンポジウム『ここまで進んだ都市防災』（2004年11月２日）後援依頼を了承した．
・応用地質学会「最新のリモートセンシング技術を応用した防災地質」（10月18日）の協賛依頼を了承した．
・海洋調査技術協会「第16回研究成果発表会」（11月18-19日）協賛依頼を了承した．

JABEE委員会（委員長
・地球資源および関連分野におけるJABEEによる2003年度の認定機関は4機関であったことが報告された．
・９月11日開催のJABEE審査員研修に参加した地質学会関係者は１名であった．今後，審査委員研修への参加者が増えるように努力したい．
・国際認定機関：Washington Accordによって日本のJABEE審査基準が評価された．日本のJABEEプログラムでは特にEngineering Design関係のプログラムが不十分であることが指摘された．関連プログラムを強化するため，本年12月４・５日に六本木ヒルズでEngineering Designに関するシンポジウムが開催される．

技術者継続教育委員会（委員長　担当理事　公文）

関連学会連合（担当理事　天野）

自然史学会連合（運営委員　森田利仁）

地理学関連学会連合

以上４件とくになし

地質科学関連学協会連合

地球惑星合同大会参加学会を中心にした日本地球惑星科学連合発足への動きが紹介された．地質科学関連学協会連合の活動を盛んにして，関連学会の各種組織化へ対応する必要性が紹介された．

会員関係（担当理事　上砂）

(1) 次の入会を承認した．

正会員［18］井尻　暁　内田昌男　小田耕市　笠原　豊　金子純二　川邉禎久　近藤久雄　田内久代　高尾晶彦　高山信紀　田口泰雄　泊　次郎　中西利典　中村典之　村田泰輔　山口耕生　Ratnayake Nalin　笠原敬司

正（院生割引）［67］赤井一行　石竹美帆　五十公野貴弘　井上　淳　岩下享平　鵜飼恵美　内田良始　浦田紀子　大塚和彦　奥直樹　小野高明　片桐　啓　兼田　心　加納大道　叶内雅之　狩俣　薫　北野富人　熊谷太朗　小泉洋介　小溝　学　坂　秀憲　桜井健太　佐々木裕美　James Hunt　塩川晃司　芝原暁彦　渋谷典幸　駿河　仁　高塚哉子　高橋友啓　竹内一将　田中勝法　田中健一　田中真二　田山良一　丹　真紀子　丹尾貴志　塚本将康　辻本　彰　寺田亜紀　東郷　清　中尾武司　中村　匠　中村紀裕　奈良岡絵美　西嶋　圭　針金由美子　久島紘樹　白井亮久　平井建丸　平岡良崇　福井亜希子　藤原祐希　星出隆志　堀川英隆　森　良太　森木洋一　屋慶名啓介　山崎　聡　山田知成　横田崇輔　横山心一郎　吉田武生　今山武志　西田尚央　藤本俊二　武川貴嘉

準会員［12］奥村　学　加藤梨枝　佐藤暢史　白鳥達也　多田恭子　千葉悦子　辻智大　原田英明　渡辺　彩　渡邊貴央　倉本麻由　中本裕介

(2) 次の退会を承認した．（正会員17名）

斎藤秀康　古川耕三　山下智士　江橋俊臣　丸山博之　ビチャイ　笹野景子　高田康秀　石田太一郎

簗浦進一　柳信一郎　蜷川清隆　石下洋平　近藤　洋　武田昌尚　武藤俊充　橋本　勘

(3) 次の会員（正会員３名）が逝去された．

正会員：田中　隆（帝国石油，7/23）大島浩（多賀町立博物館，7/29）中沢義明（8/22）

(4) 会員の動静（2004年２月29日現在）

	賛助会員	名誉会員	正会員(内 院生割引)	学生会員	合計
2004. 5.31	38	72	4634(177)	30	4774
2004. 8.31	38	72	4707(257)	43	4860
増・減	0	0	＋73(＋80)	＋13	＋86

(5) 50年顕彰会員の追加について

事務局において再調査を実施した結果，７名の方々が50年顕彰会員としてリストアップされていないことが判明した．これらの方々を顕彰者として追加する．合計23名の顕彰者となる．

(6) 本年度は会員名簿発行の年である．ニュース誌６，７月号にて個人情報保護に関連するアンケートを実施した．同アンケートは千葉大会会場内にても実施する予定．この結果をもとに会員名簿の体裁を改訂する．
・会員増減を示す資料について質問があった．前年同時期，あるいは過去と比較して会員数がどのように変化しているかが不明瞭であった．会員状況がわかりやすい表記方法を検討し，会員現況関係の資料表記を改善する．

会計関係（担当理事　大友，上砂）

・７月までの会計報告と2004年決算見込みが報告された．
・7/23会計委員会を開催した．

１）法人化に向けた基本財産の確保

法人化の見通しが経った段階で，予定金額に達しない場合，不足分は一般会計から補填することはやむを得ないものと考える．文科省の手続き等で法人化の許可が遅れた場合でも，今後の学会運営および社会的責任を果たす目的での基本財産の確保は，必要不可欠なものとして，募金を醵金者に返却するなどの措置はしないということを，会計委員会として確認した．

２）事業年度（＝会計年度）の変更に関して

会計委員会として決算手続き等について検討した結果，３月末で締めた場合，５月総会というのは技術的にたいへん困難であるとの大方の意見であった．総会に提出する決算報告書類が整うまでには，少なくとも３ヶ月はかかることが指摘され，４月から５月にかけては理事会や監査の日程調整もたいへん難しいものと思われる．

法人として３月末日に会計を締めることが決まっている．締めの時期を早める（一ヶ月程度早める）ことなどで総会に間に合わせるように努力することを確認した．

・地質学雑誌の印刷所（現在日本印刷）の契約更新にあたり，現在見積りを４社から取り，検討中．
・千葉大会のジュニアセッションの参加記念品，先にフィールドノートを予定したが，参加人数などの関係で，名入シャープペンを参加記念品として参加者全員に配ることに変更．

２）広報委員会

News誌編集小委員会（担当理事　大友）

・ニュース誌編集状況：８月号までの発行ページ数242ページ．９月号（編集中）：浅間山噴火速報記事，表紙写真と記事．10月号以降の予定：IGC特集を予定（原稿募集中）．千葉大会期間中にも原稿依頼，記事集めに努力する予定．

インターネット運営小委員会（委員長　渡部直喜，担当理事　大友）

とくになし

2　学術研究部会

1）行事委員会（担当理事　徐）

・千葉大会発表申し込みは7/14〆切りを，ポスター発表に限って19日まで延長した．申込数は，一般発表565件（ポスター298，口頭267），シンポジウム（6件）発表　40件

・各セッションの世話人による講演要旨の校閲の結果は，問題となるようなものはなかった．

・ポスター賞の受賞者枠を増やす．18日に限りポスター賞の授与は総会会場で行う．

・総会を合同大会（幕張メッセ）の機会に開催する可能性について来年の場合，5/22の昼（1.5ないし2時間程度）なら可能であること，総会のみの参加者の入場は無料措置ができる．会場室料は時間に応じて負担．

・緊急展示コーナーを設置．9月13日までに申し込みがあったものは，講演要旨を作成してはさむことにする．

・9月20日のランチョンAOGSの進め方について検討し，斎藤新会長に趣旨を含めた挨拶を，木村副会長に学会再編の報告もあわせてしてもらう事とした．従って，演者は斎藤，佐竹，木村，脇田の各氏，および若干名とし，司会は吉田武義理事が行うこととした．この集会への参加を評議員に呼びかけることとした．

・来年度の京都大会の準備を強化するため行事委員会に関西支部・京都大会関係者を加える予定．

2）専門部会連絡委員会（担当理事　伊藤）

とくになし

3）国際交流委員会（担当理事，委員長　脇田）

・IYPE国際惑星地球年，32nd IGC（フィレンツェ），CCOP年次総会開催（11月）に関する報告があった．

4）研究委員会

(1) 環境地質研究委員会（委員会会長　羽田忍；代理　上砂）

12月4，5日に東京大学農学部にて環境地質学シンポジウムを開催する予定．

(2) ヒマラヤ地質研究委員会（委員長　在田一則）

第19回Himalaya-Karakoram-Tibet Workshop（HKT19）を2004年7月9日～12日に北海道ニセコ町，ニセコ東山プリンスホテルで開催した．参加者は117名（国内45名，国外13ヶ国72名），発表論文117篇（口頭63篇，ポスター54篇）．開催に際しては，日本地質学会をはじめ，ILP，日本第四紀学，東京地学協会，構造地質研究会，北海道，ニセコ町のほか，財団などから後援・援助をいただいた．13日には67名が参加して有珠火山-昭和新山の地質巡検を行った．プロシーディングスは「Journal of Asian Earth Sciences」および「The Island Arc」の特集号として2005年度に刊行する予定で準備をすすめている．会議報告（吉田勝ほか）を「日本地質学会News」に投稿中．なお，次回のHKT20は2005年3月29日～4月1日にフランスで開催されることが決まった．HKT21はイギリスの予定．

(3)「地質学と地震」研究委員会（委員長　嶋本利彦）

(4) 南極地質研究委員会（委員長　廣井美邦）

(5) 地質環境の長期安定性に関する研究委員会（委員長　高橋正樹）

以上3委員会とくになし

3　編集出版部会

1）地質学雑誌編集委員会（担当理事，委員長　狩野，副委員長　宮下）

編集状況

・8月号までの発行ページ数　500ページ

・9月号：校正中（論説5　ノート1　討論2　口絵1）

・10月号：特集「飛騨外縁帯研究の進展と展望」（世話人：小嶋　智），表紙は通常号とは変える．

・本年度投稿論文数69編［論説57編（和文53　欧文1），総説1，短報8（和文7　欧文1），ノート4，討論2］口絵9（和文4　欧文5）

・投稿数昨年比　＋11，査読中　51編．昨年度の投稿数が少なかったことを考慮すると，本年度の投稿数はほぼ従来通りである．

・J-STAGE公開について

来年早々からの公開を期して準備を開始．印刷公開後，3ヶ月後にpdfファイルとして公開する．ノートなどにも，今後はアブストラクトやキーワードをつけることを検討している．

2）企画出版委員会（担当理事　吉田）

・地質学論集58号最終計画案および見積もりがでたので最終承認した．

700部，印刷所は㈱イセブ，頒布価格は，3600円～4000円の間，編集委員会と販売計画など確認，相談のうえ決定．

・「一般教養向け地学副読本」作成プロジェクト（提案者原田憲一会員）の立ち上げについて報告があった．天野理事より経緯について説明があった．理事会で了解が得られたので具体的な提案内容の提出を依頼した．

3）The Island Arc連絡調整委員会（担当理事　会田）

・平成17年度科研費は基本的に昨年並みで申請することとする．

4）The Island Arc編集委員会

・本雑誌に投稿掲載された論文と同じ内容ものが他の国際誌に掲載されている．初出に関係なく，サーキュレーションの良い方の論文が引用されることが危惧される．現在，著者らに事情の説明を求め，調査している．

5）地質学用語集出版委員会報告（坂　幸恭委員長，新妻信明）

・最終報告と9月17日付けにて委員会解散の承認要請については了承された．

・9/14印刷完了，千葉大会より販売開始，1部4,200円

・用語に関係した常置委員会を設けて活動を継続できるように理事会で検討することが要請された．

4　普及教育事業部会

1）学校教育委員会（委員長　阿部国広，担当理事　中井）

・7/20，9/8委員会開催

・新「地学教育委員会」の委員会規約案を作成

運営細則第14条1項（4）普及教育部会の文言，学校教育委員会を「地学教育委員会」に変更する．

・「小さなEarth Scientistのつどい」千葉大会への申し込みは12校，発表数約29件，参加者総数129名．参加者が当初の予定より大幅に多く，参加記念品については名入りのシャープペンシルなどを全員に配ることを了承した．

・千葉大会関連行事「理科教員対象見学旅行」および「小さなEarth Scientistのつどい」にたいし，千葉県教育委員会の後援を得た．

・千葉県地学教育委員会との共催のもとに，29名の参加を得て，充実した巡検が行われた．

・学校科目「地学」関連学会連絡協議会報告（委員　佐瀬和義；代理　阿部）

・小中高の無駄のない整合的な地学カリキュラムに基づいた副読本を作成する予定．その成果をもとに新しい地学カリキュラムを文科省へ提言することを計画．

・教科書出版社より教師用副読本の改訂依頼があり，対応する方向で検討を開始したことを紹介．

・地球惑星科学関連学会「地学教育委員会」（委員　阿部国広，担当理事　中井）

合同大会「地学教育委員会」は理数系学会教育問題連絡会に正式加盟をした．登録委員は

渡辺秀文（地球惑星科学関連学会連絡会会長・火山噴火予知研究推進センター・東京大学地震研究所）

阿部国広（日本地質学会・学校教育委員会委員長・川崎市立西有馬小学校）

南島正重（日本地震学会　学校教育委員日本地学教育学会　常務委員）

中井仁（地球惑星科学関連学会連絡会／「地学教育」委員会世話人・大阪府立茨木高等学校）

間々田（追加）

中教審に対する要望書を登録学会の意見をもとに作成中

・地質学会として理数系学会教育問題連絡会に正式に加盟することを理事会で検討する．

2）生涯教育委員会（委員長　柴　正博，担

当理事　中井）

・千葉大会での夜間小集会の開催準備

9月19日の千葉大会での夜間小集会を学校教育委員会と合同で「博物館と学校の地学教育の普及」というテーマで開催するための準備をおこなった．

3）地質基準委員会（委員長　新妻信明）

・第二次地質基準について検討を開始する予定．

4）地層名委員会（委員長　天野一男）

・ヨーロッパでの地質時代名称改訂の動きが紹介された．米国も含めた国際的な地層名改訂の動向に注目しながら，地質学会として早急に対応することが確認された．日本の層序学に関する現状や事情に配慮し，我が国から発信することが必要であることを確認した．この件に関して理事会にて対応策を検討する．

5　その他（理事会関係の委員会等の報告）

支部長連絡会議（担当理事　玉生）

・支部活動報告（03年9月以降04年8月まで）

・支部規約のモデル案を作成し，各支部に配布した．モデル案は各支部に固有な事情に応じて適宜変更されるべきものである．ただし，本部より支部へ提供している予算に関しては，法人として地質学会が予算を締め，決算する都合に従うべきものであることを確認した．

地質災害委員会（担当理事　玉生）

・地質災害委員会（2004.6.26）議事録

・福井県豪雨災害緊急調査報告，中部支部野沢会員，田崎会員などからの写真提供をHPに掲載．新潟大学，福井大学の調査報告を8月号のnews誌に掲載した．千葉大会での緊急展示にも出展あり．

・浅間山噴火（9/1）について，News誌9月号の表紙写真，記事を掲載する．千葉大会での緊急展示にも出展あり．

・学会として地質災害時の調査に積極的に取り組むことに加えて，学会として被災会員や被災地域の住民に配慮することも必要であるとの意見があった．

Ⅱ　各種委員会報告（評議員会関係）

1　各賞選考委員会（委員長　新井田清信，担当理事　伊藤）

2　名誉会員推薦委員会（担当理事　委員長加藤副会長）

3　科学研究費委員会（委員長　竹内　章，担当理事　公文）

以上3委員会とくになし

4　学術会議連絡委員会（担当　井内）

1）地質学研連（井内委員）

学術会議より科研費の分科細目に関して時限付き項目の募集中である．

2）IGCP専門委員会（田崎委員）

・田崎委員より地学教育アンケートについて補足説明があった．

5　女性地球科学者の未来を考える委員会（委員長　田崎和江）

・8月18－28日にイタリア，フローレンスでIGCが開催され，その期間中，8月26日にIUGSとIGCのジョイント会議が開かれた．今回のIGC会期中に保育室は設けられなかった．2008年はノールウエー，2012年はオーストラリアでIGCが開催されるが，福祉の発達したノールウエーには沢山の女性地質屋，夫婦研究者がいるので，この点の改善が期待される（帰途，アムステルダム空港で乗客のために乳児室と保育室が完備されているのを見つけ，感激した）．

・男性の育児休業に関する情報を別紙で配布（男女共同参画情報メール第70号より抜粋，H16.9.3発行）．

6　地学教育委員会（委員長　佐瀬和義）

・阿部委員より，10月6日に3学会（地質学会・地学教育学会，地学団体研究会）共催で，堆積についてのシンポジウム（講師：立石雅昭）が開催されるとの説明があった．

7　研究企画委員会

とくになし

8　法人化準備委員会（委員長　木村　学，担当理事　渡部，玉生）

・募金委員会報告

8月末現在の募金総額12.317.850円，募金者数500人弱（基本財産額は約1,500万円となる）

千葉大会会場における募金活動について

・木村委員長より，文部科学省との交渉を継続しており，千葉総会を設立総会にできなかったが，今後法人化に向けて交渉に努力する旨の説明があった．

・加藤募金委員長より以下の補足説明があった．「基本財産2000万円」の確保のためには「多くの会員が募金に協力する」ことが必要であり，現状では不十分である．そのため会員のより一層のご理解と更なる募金活動を継続していきたい．

9　法務委員会・倫理規定策定委員会（上砂委員長，松本　良委員長）

・7月6日に以下の内容で委員会を開催した．

1）支部等の出版物についての著作権に関する手続きと学会等の発表，ポスターなどのカメラ，ビデオによる撮影等，取材について．取材者からの申し入れがあった場合，行事委員会が対応する．会場での写真撮影等については，会場内の貼り紙，ならびに講演要旨等に掲載して注意を促す．

すなわち，著作権の保護と同時に，写真撮影など発表に対するエチケットを守ることが大切である．

2）2004年度第4回定例評議員会で議論された関東支部主催の学部学生，社会人を対象とした第1回フィールドキャンプ参加者の安全面を含めた実施要領等の整備に関する事項について．

・千葉大会での緊急展示に関する発表内容の校閲について検討した．9月13日までに届いたものは，行事委員会が一般発表と同様に行う．それ以後のものは個別に対応する．

10　オンライン化委員会（鈴木徳行　委員長）

・鈴木委員長より，千葉大会オンライン発表申し込み状況と今後についての説明があり，やり方を改善しながら継続していく必要があることが提案された．

11　地質学雑誌のありかた検討委員会（加藤碩一　委員長）

・加藤委員長より，ハードコピーとしての学会誌の重要性を感じる，また特集を組むこともよいのではないかとの説明があった．

Ⅲ　選挙管理委員会（手塚裕樹　委員長）

とくになし

Ⅴ　理事会審議事項報告

1．年会の非会員の参加費，特に特定のシンポジウムのみに参加したい場合の参加費について，1日参加費の設定，会員との関係，および手続きなどを検討したが，特にこれに対応する措置はとらないこととした．

2．会員のメールアドレスを整備してHPの更新や緊急時の連絡に活用できるように取り組む．配信希望者が自動的に登録できるようなシステムをHP上に作って登録するよう宣伝する．

3．募金拠金者に対して，募金目標額の達成時，法人化の設立総会時などに何らかの形でお礼する方法を，今後，検討していくこととした

4．地球惑星合同大会関係学会連携のあり方委員会による，「日本地球惑星科学連合（仮称）」設立準備会への対応について，臨時理事会（8/12）を開き，以下の事項を決定した．

「日本地球惑星科学連合（仮称）」を担う学会としては法人格を有している必要があり，そのためにも地質学会は早急に法人団体にならなければならないし，以下の3項目を積極的に推進する必要がある．

1）設立準備会へ積極的に参加する．具体的対応は理事会が行う．

・準備委員：木村，脇田

2）地球惑星科学の連携の動きをふまえ，理事会が主体となり関連学協会と連携し，学術総合雑誌（Island Arc）のあり方，地球惑星科学における地質科学の役割などについて，幅広い検討を行う．

・関連学協会との連携検討ＷＧの設置（担当：斎藤・天野・玉生）

3）地質学会の法人化後の長期的展望について，評議員会のもとで議論を開始することを提案する．

5．監事，選任の件（総会での議決事項）→

審議事項へ

外部からの監事1名（任期：04年9月18日から2007年総会まで）は，山本正司氏（司法書士）を選任し，総会に諮ることとした．

審議事項

1．2004年度決算見込み案および2005年度暫定事業計画と予算案について

上砂理事より，2004年度7月までの収支状況とそれにもとづく12月末での決算見込みの説明があった．ほぼ予算どおりの進捗であり，支出は関係者の努力で予算を300万円程度低減させることができそうとの説明であった．審議の結果，支部補助費は支出されるかなどの質問があった以外は，全員一致で承認された．

2005年度暫定については，次の審議事項である「2．事業年度変更に関わる件」が承認され，事業年度の変更が認められた場合に行うこととなるとの事前説明があった後，資料にもとづいて2005年1月から3月間の暫定予算の説明があった．基本的にはこれまでの基本方針にもとづく予算編成内容であり，「2．事業年度変更に関わる件」が認められた後，全員一致で承認された．

2．事業年度変更に関わる件

1）会則ならびに運営細則の改正について

渡部常務理事より，下記に示す事業年度変更に関わる会則および運営催促の変更について説明があり，全員一致で承認された．なお，会則変更については予定通り9月18日の総会で審議される．

＜会則細則＞

第30条　通常総会は，毎年9月に会長が招集する．

→通常総会は，毎年事業年度終了後3ヶ月以内に会長が招集する．

第44条　この学会の事業年度は，毎年1月1日に始まり，12月末日に終わる．

→この学会の事業年度は，毎年4月1日に始まり，翌年3月末日に終わる．

＜運営細則＞

第12条　本会会費の年額（1月～12月）を次のように定める．

→本会会費の年額（4月～翌年3月）を次のように定める．

2）評議員会の開催回数の変更

渡部常務理事より，下記に示す事業年度変更に関わる評議員会の開催回数について説明があった．評議員の負担や会議の必要性を考えて提案どおり4回開催とすべきという意見と，できるだけ多くの会議をもつべきである，また12月に開催しないと6ヶ月も評議員会が開催されないのは学会運営上問題ないかとの相反する意見があった．

その結果，もう1年間これまでどおりの開催を行う中で，回数の妥当性を検討し，来年度再提案したいため，今回は下記の提案を保留するとの理事会から説明があり，本件の保留が承認された．

以下は，理事会提案内容であり，既述したように本件は保留となったため，改正は今回行われないことに留意されたい．

審議の結果，保留のため下記の理事会提案による改正はなし．

現状：5回開催

1回目　9月（総会直後），2回目　12月，3回目　3月，4回目　6月，5回目　9月（総会直前）

改正案：4回開催

1回目　5～6月（総会直後），2回目　9月（年会時），3回目　3月，4回目　5～6月（総会直前）

上記次第により下記の理事会提案による改正なし．

・上記に伴い，運営細則21条の改正をおこなう．

改正案：運営細則第21条2項　定例評議員会は年5回開催され次の審議をおこなう．

→定例評議員会は年4回開催され，次の審議をおこなう．

上記次第により開催数の変更はなく，これまでどおり05年12月も開催．

・移行期の評議員会開催予定

04年総会以降：

1回目　04年9月，2回目　04年12月，3回目05年3月，4回目05年5月

05年総会以降：

5回目　05年9月（年会時），6回目　06年3月，7回目06年5月または6月

3）各賞の表彰，その他顕彰の時期について

渡部常務理事より，事業年度変更に伴う各賞の表彰，その他顕彰の時期について，以下の説明があり，承認された．

・論文賞等の論文の対象期間はこれまでと同様の暦年区切りとすることで，継続上の問題はない．

・各賞委員の選出は，05年度は第1回9月の新評議員会で行う．

・新選考委員会による選考は05年1月から始まり，05年5月の4回目の評議員会で決定し，総会に報告する．

・表彰は総会ではなく9月の年会時に行う．名誉会員証の授与，50年顕彰会員の顕彰も同様とする．

4）その他

・来年の総会開催については地球惑星関連学会合同大会開催時の5月22日昼に開催することとし，会場は仮押さえをしてある旨の説明があり，承認された．なお，以後の総会については，会計決算との兼ね合いで，3月決算で5月総会に間に合わせることは物理的に無理であれば，合同大会を6月に移行できるか否か打診する必要があるとの説明があった．

・年度変更に伴う，05年度会費の徴収について

05年1月～3月分として，会費額の1/4を05年4月から06年3月までの会費に加えて請求することとする旨の説明があり，承認された．

3．第111年総会議事について

渡部常務理事から，以下の説明があり，承認された．

・要点は議案説明のとおり，ただし，ニュース誌7（8）p2の運営細則第44条の改正としたのは会則第44条の間違いである旨の訂正があった．

・「倫理綱領を盛り込んだ会則改正」については，ニュース誌7（8）p2には記載されていないが「5．その他」として審議することとする．

なお，「審議4の法人化の決議」はニュース誌7（8）p2の内容ではなにを決議するのか曖昧である．そのため，総会当日では補足説明することになった．

4．合同大会参加学会の連携について

日本地球惑星科学連合（仮称）」設立準備会への対応について，「V　理事会審議事項報告　4．1），2）」で説明された内容（前述）が承認された．

5．法人化後の学会事業計画について

地質学会法人化後の長期展望を評議員会のもとに専門の委員会を設置して検討する（「V　理事会審議事項報告4．3）」）で説明された内容（前述））ことが承認された．

6．地質学論集58号（藤原他）の最終計画案について

地質学論集58号（地震イベント堆積物―深海底から陸上までのコネクション―藤原　治他）の最終出版計画が説明され，700部印刷，単価は学会内規に従って決定させることが承認された．

7．その他

1）50年顕彰会員7名の追加（合計23名）

50年顕彰会員として，2004年7月22日の第4回定例評議員会で承認した16名（ニュース誌7（8）p27）の他に，以下の7名の会員を合わせて顕彰することとなり，承認された．

学会事務局の手違いで，当初のリストから外れた7名の方々に深くお詫び申し上げる．

（敬称略）：石井良治，宇留野勝敏，岡田博有，武井晃朔，竹内貞子，邑本順亮，籾倉克幹

2）監事，選任の件

監事として，山本正司氏（司法書士）（「V　理事会審議事項報告　4．5）」）を総会に提案することが承認された．

3）新「地学教育委員会」の委員会規約案および細則の一部変更

教育普及活動を発展させるために，これまでの「地学教育研究委員会」と「学校教育委員会」を統合して，新たに理事課の元に「地学教育委員会」が設置され，その委員会規約および細則の一部変更についての説明があり（「I　報告事項　4．1）」），承認された．

（金融機関・郵便局用）　　平成　　年　　月　　日

預金口座振替依頼書
自動払込利用申込書（収加）

私は、SMBCファイナンスサービス株式会社から請求された金額を私名義の下記預金口座から預金口座振替によって支払うこととしたいので、預金口座振替規定を確約のうえ依頼します。

収納代行会社	SMBCファイナンスサービス株式会社 （旧株式会社三井ファイナンスサービス）	振替日	6日・23日（金融機関休業日の場合は翌営業日）

（フリガナ） 申込人名		申込人住所	〒 ☎

民間金融機関または郵便局のうちどちらか一つをご指定ください。

民間金融機関用 捨印

民間金融機関

金融機関コード		支店コード		預金種目（どちらかに○印）	口座番号（右詰めでご記入ください。）
銀行 信用金庫 組合	本店 支店 出張所			1. 普通 2. 当座	
（フリガナ） 口座名義人	法人の場合は、社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。			金融機関お届け印	印

郵便局

（フリガナ） 口座名義人	法人の場合は、郵便局へお届けの社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。	郵便局お届け印	印

種目コード	契約種別コード	通帳記号	通帳番号（右詰めでご記入ください。）
166	30	1　　0 の	

払込先口座番号	00110－5－58830	払込先加入者名	SMBCファイナンスサービス株式会社

ご注意！ 金融機関へのお届け印ですか お通帳でご確認ください

〈収納企業使用欄〉

収納企業名	日本地質学会	料金等の種類	会費等
契約者番号	委託者コード 1847600	顧客コード 00000	

－預金口座振替規定－　※郵便局払いは除く。

1. 銀行（金庫・組合）に請求書が送付されたときは、私に通知することなく、請求書記載金額を預金口座から引落しのうえ支払ってください。この場合、預金規定または当座勘定規定にかかわらず、預金通帳、同払戻請求書の提出または小切手の提出はしません。
2. 振替日において請求書記載金額が預金口座から払戻すことのできる金額（当座貸越を利用できる範囲内の金額を含む。）をこえるときは、私に通知することなく、請求書を返却してもさしつかえありません。
3. この契約を解約するときは、私から銀行（金庫・組合）に書面により届出ます。尚、この届出がないまま長期間にわたり会社から請求がない等相当の事由があるときは、特に申出をしない限り、銀行（金庫・組合）はこの契約が終了したものとして取扱ってさしつかえありません。
4. この預金口座振替についてかりに紛議が生じても、銀行（金庫・組合）の責めによる場合を除き、銀行（金庫・組合）には迷惑をかけません。

金融機関使用欄	（不備返却事由） 1. 預金（貯金）取引なし　3. 印鑑相違 2. 記載事項等相違 店名、預金種目、口座番号、通帳記号、通帳番号、口座名義 4. その他（　　）		
	備考		
	検印	印鑑照合	受付印

受付　局　日　時　印

（民間金融機関・郵便局へのお願い）
この預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書に不備がありましたら、不備返却事由欄の該当項目に○印をつけて速やかに右記不備返却先へご返送ください。

（不備返却先）
SMBCファイナンスサービス㈱　〒160-8440
東京都新宿区新宿 2-16-6　☎03-5362-2856

◎書類の流れ　お客様→収納企業→SMBCファイナンスサービス→金融機関

裏面のりしろ①

キリトリ線

80円
切手
貼付

101-0032

東京都千代田区岩本町
二丁目八―一五　井桁ビル内

日本地質学会

御中

オリ線

住所

氏名

オリ線

裏面のりしろ③

キリトリ線

裏面のりしろ②

研究室のミニ工場

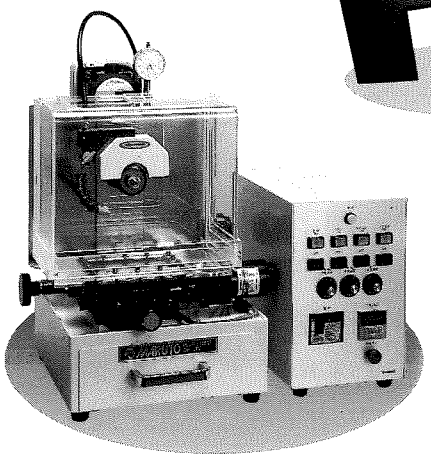
マルトーの ラボ・ファクトリープラン 3点セット

分析・検査用試料作製機器
〈切断・研削・研磨〉

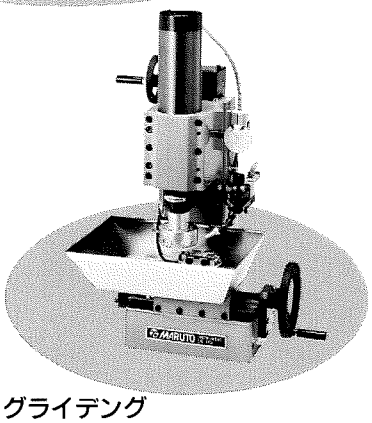
小さな機械(なり)だが役に立つ

小型 精密 操作簡単 低価格

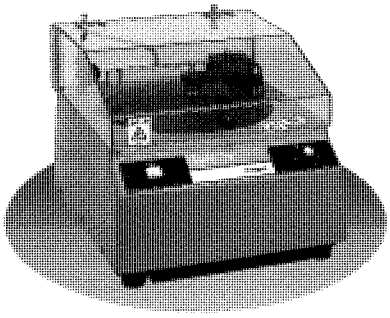
3機種揃えば、各種試料の精密加工が可能です。
(ガラス・水晶・シリコン・セラミックス・鉱物・金属材料などの加工)



カッティング
連続・浅切込みができる
ステップカッター
〔MC-170Y〕
- 試料へのダメージが少ない
- 最小切込み量 10μm／pass
- 最大加工能力 H25×L40mm
- 設置面積 W550×L450mm
- 本体価格 185万円～



グライデング
立軸平面研削機
プレパラップ
(MG-300)
- 最小切込量は、0.01mm目盛
- 加工サイズは、MAXφ50mm
- 任意研削面の逐次観察が可能
- 研削・研磨、同一治具使用により、研削・研磨工程は簡単で高精度
- 設置面積 W560×L380×H640mm
- 本体価格 98万円～



ポリッシング
精密鏡面研磨機
ドクターラップ
〔ML-180〕
- 組織検査用試料のラッピング・ポリシング
- アクセサリー豊富
- 研磨試料サイズ φ1～φ100mm
- 設置面積 W400×L400mm
- 本体価格 45万円～

☆貴重な試料を無駄なく手軽に加工したい、各種カタログあります。開放実験室でテスト加工が可能です。

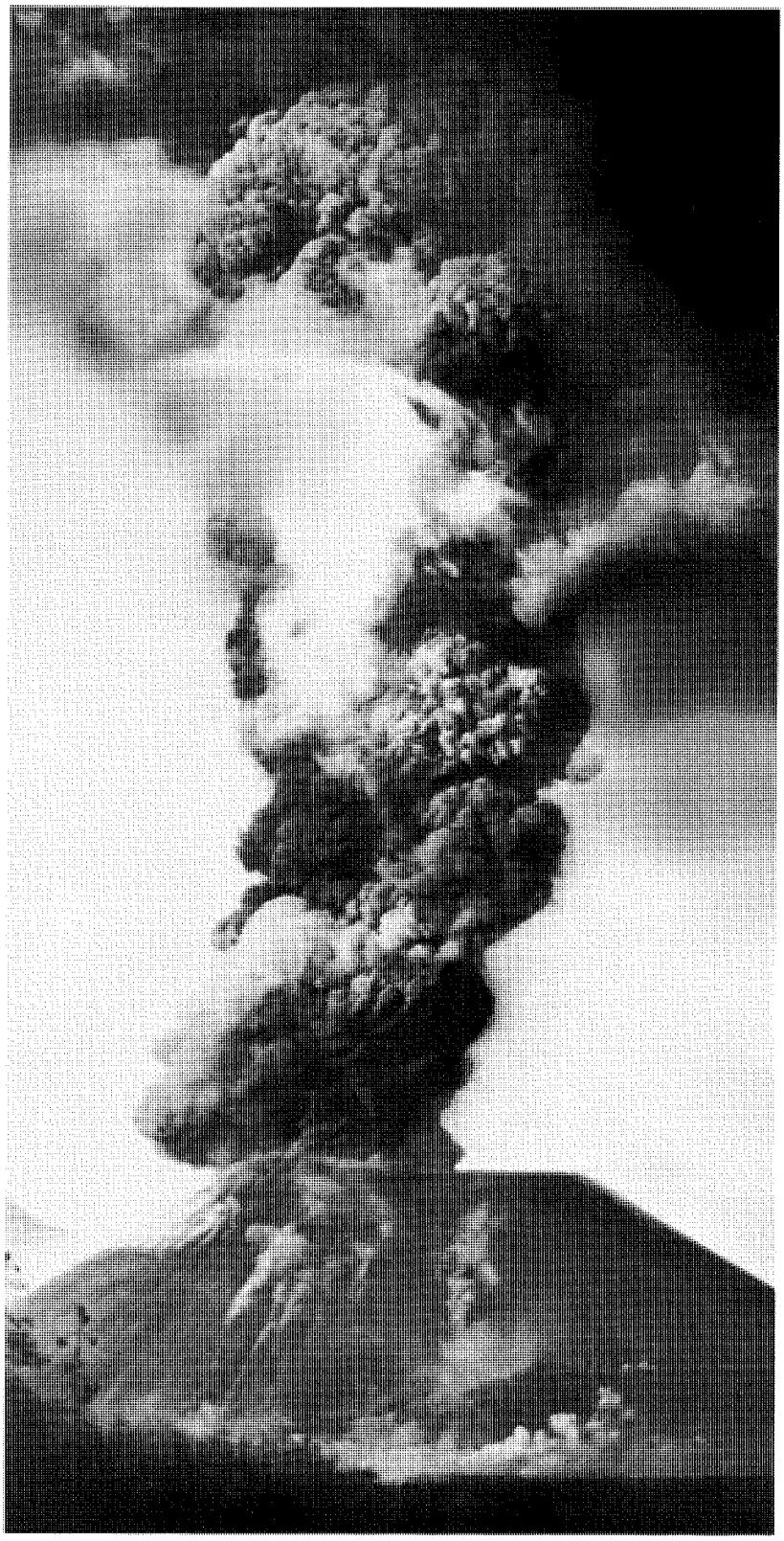
材料を 切る・削る・磨く そして 測る 技術で奉仕する

株式会社マルトー®

本　社／〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-10
☎東京(03)3251-0727(代表) FAX:東京(03)3251-2478
福岡連絡事務所／〒815-0033 福岡市南区大橋1-21-5 岩田ビル
☎福岡(092)512-2755 FAX:福岡(092)561-4288

E-mail:maruto@maruto.com http://www.maruto.com

READING THE ISOTOPIC CLOCKS



地質年代の測定

御社の調査・研究に必要とされる信頼出来るデータおよび特別なご注文については、経験と実績の豊富な当社へおまかせ下さい。

- K/Ar 年代測定
- Rb/Sr 年代測定
- ^{14}C 年代測定
- 堆積速度の査定
  (^{210}Pb, ^{137}Cs, ^{7}Be)

堆積速度の査定についての詳細は下記のURLをご参照下さい。
http://www.iadc-dredging.com/terra-et-aqua/2000/78-4.htm

- Boron11/10同位体測定

ジオスペース・サイエンス株式会社

〒170-0013
東京都豊島区東池袋1-20-2
池袋ホワイトハウスビル　620号
TEL03-5950-3661 FAX03-5950-3662
E-mail:sales@geospace.co.jp
http://www.geospace.co.jp/

©日本地質学会　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F　電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156　E-mail：main@geosociety.jp　ホームページ http://www.geosociety.jp